

2021年度 日本テスト学会 第19回大会  
実行委員会企画録画講演「テストの現状と将来展望」



# 発達障害領域で用いる検査の 開発と臨床使用

帝京大学文学部心理学科

黒田美保

2021.9.25

# 自己紹介



- ・発達障害、その中でも自閉スペクトラム症の研究を行っている。公認心理師・臨床発達心理士・臨床心理士。
- ・2005年から2006年に米国ノースカロライナ大学自閉症研究部門 (TEACCH部) にロータリー財団奨学金にて留学。その時に学んだ自閉スペクトラム症の症状を的確につかむための検査に感動し、帰国後、自閉スペクトラム症の診断のゴールド・スタンダードといわれるADI-R, ADOS-2の日本語版作成。
- ・同時に、留学中に学んだVineland-II適応行動尺度の日本語版作成を行った。
- ・その他、自閉スペクトラム症成人の小集団認知行動療法の開発、現在は、発達早期の支援方法の開発を行っている。

# 内容

1. 発達障害と検査（アセスメント）
2. 支援を考える時に重要な適応行動の検査  
Vineland-II適応行動尺度
3. 架空事例を通して考える臨床使用  
～検査から支援まで～

# 1. 発達障害と検査（アセスメント）



# 障害とは？

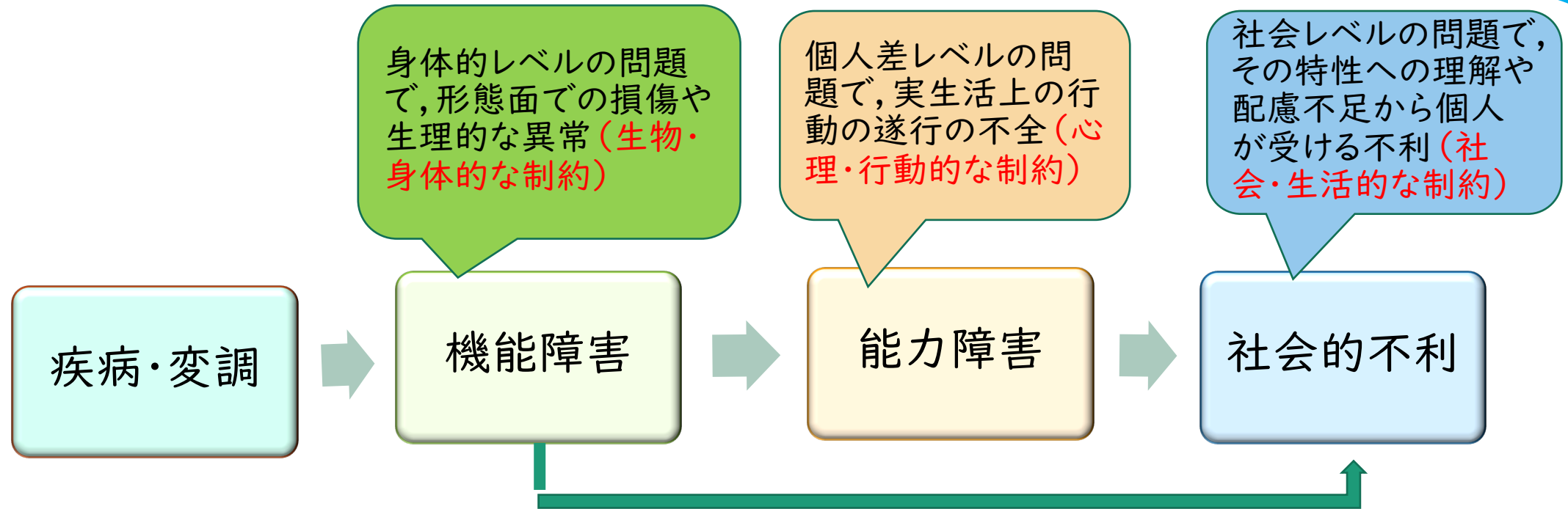
- WHOが定めるICF（国際生活機能分類、2001）では、生活機能という考え方が提言されている。
- 生活機能とは「人が生きること」全体であり、健康とは「生活機能」全体が高い水準にあること示す。

→ 社会モデル

- WHOのICHDH（世界障害分類・1980年）は、機能・形態障害→能力障害→社会的不利（職を失う、社会参加できないなど）につながるとした。障害が社会的不利に繋がるという視点が当時は新しかった。

→ 医学モデル

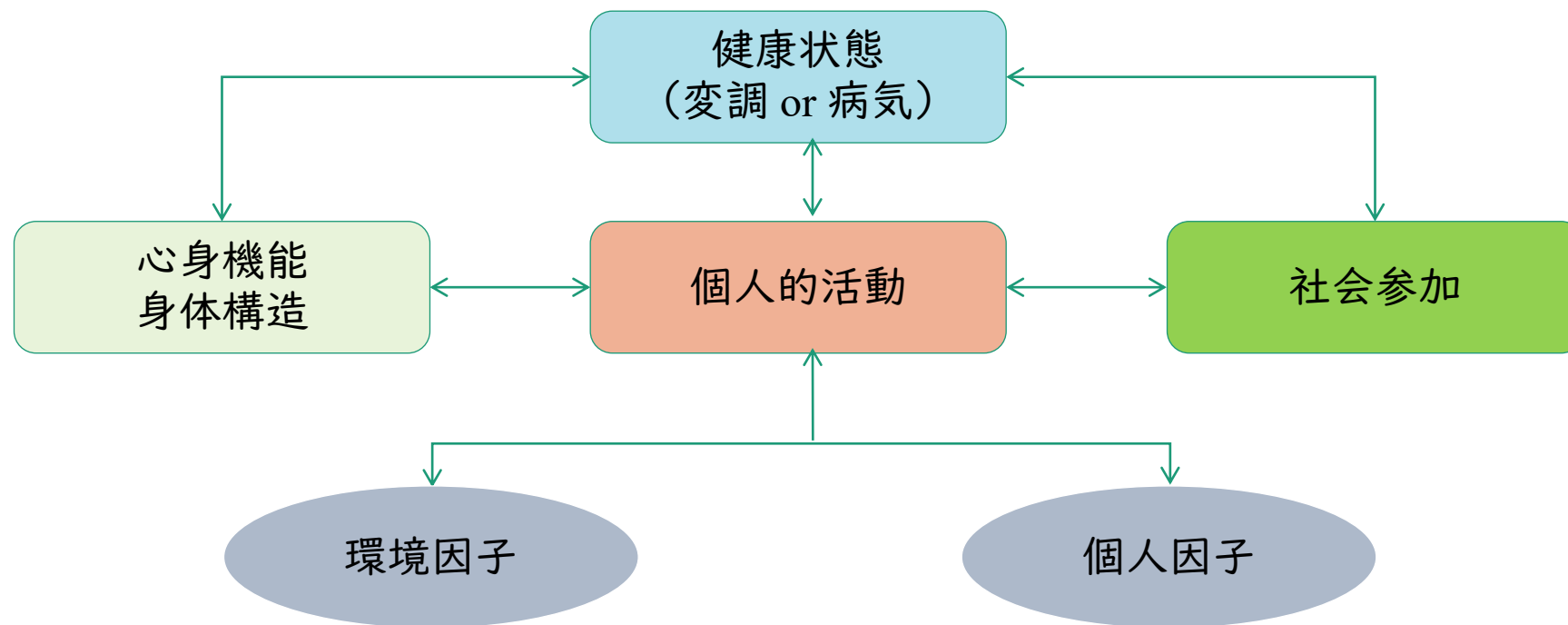
# 世界障害分類 (ICIDH) の障害概念 (WHO, 1980)



足が動かない から 歩けない から 外出できない

機能障害を治さなければ問題は解決しない (医学モデル)

# 国際生活機能分類 (ICF) の障害概念 (WHO, 2001)



**足が動かない でも 車いすに乗れる だから 外出できる**

- 機能障害があっても、環境因子と個人因子の改善によって個人的活動と社会参加ができれば健康な状態となる。
- 障害を区別するのではなく、生活機能という連続線上で障害を理解する視点

# 発達障害の診断基準の歴史

発達障害とは？ 生まれつきで生涯続く障害

## ◆ 発達障害の概念の成立：

1960年代の精神的発達への関心とともに、子どもの心と行動の障害を整理しようとする機運が起こった

## ◆ ICD-9 (国際疾病分類基準9版, 1987年)

DSM-III (アメリカ精神医学会, 1980年) に、発達期のほとんどの行動の障害がカバーされた

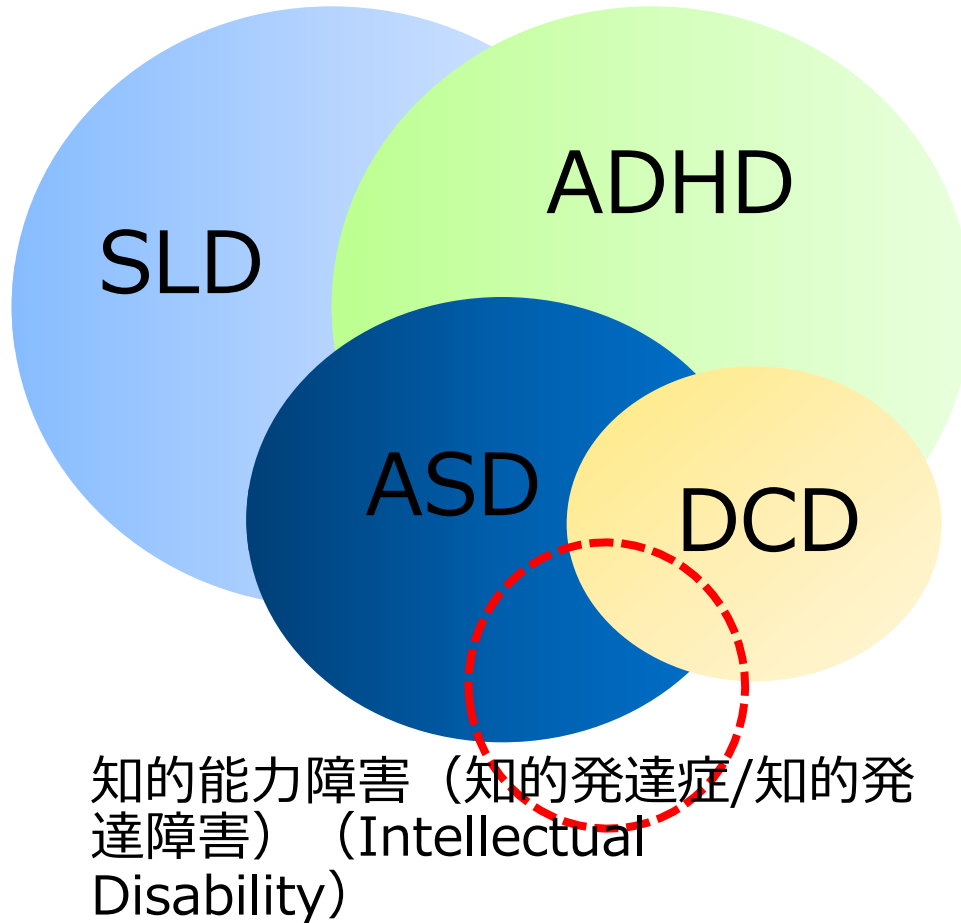
## ◆ DSM-5 (アメリカ精神医学会, 2013年)

通常, 幼児期, 小児期, または青年期に初めて診断される障害

(Disorders Usually First Diagnosed in Infancy, Childhood, or Adolescence →

神経発達症群/神経発達障害 (Neurodevelopmental Disorders)

# 発達障害の種類とその重なり： 神経発達症群/神経発達障害群



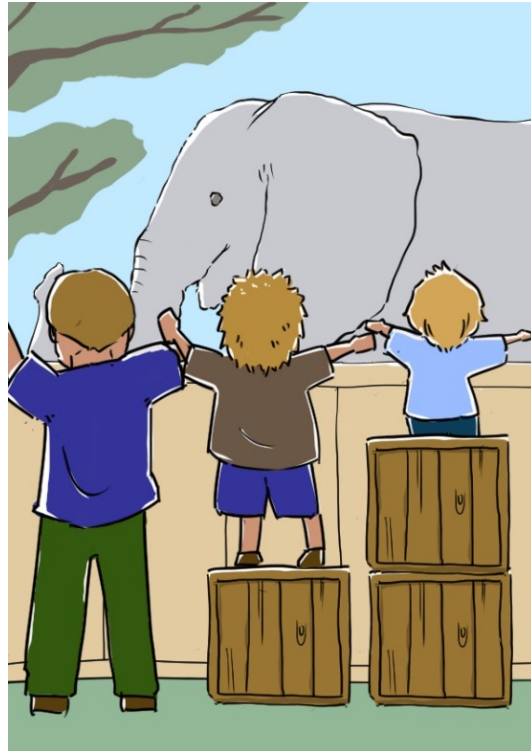
- ・自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害 ASD  
(Autism Spectrum Disorder)
- ・注意欠如・多動症/注意欠如・多動性障害 ADHD  
(Attention-deficit / Hyperactivity Disorder)
- ・限局性学習症/限局性学習障害 SLD  
(Specific Learning Disorder)
- ・発達性協調運動症/発達性協調運動障害 DCD  
(Developmental Coordination Disorder)

- ・障害が併存することは非常に多い
- ・同じ診断名でも他の疾患の併存によって、支援ニーズが異なる

# これからの発達障害の検査に求められるもの

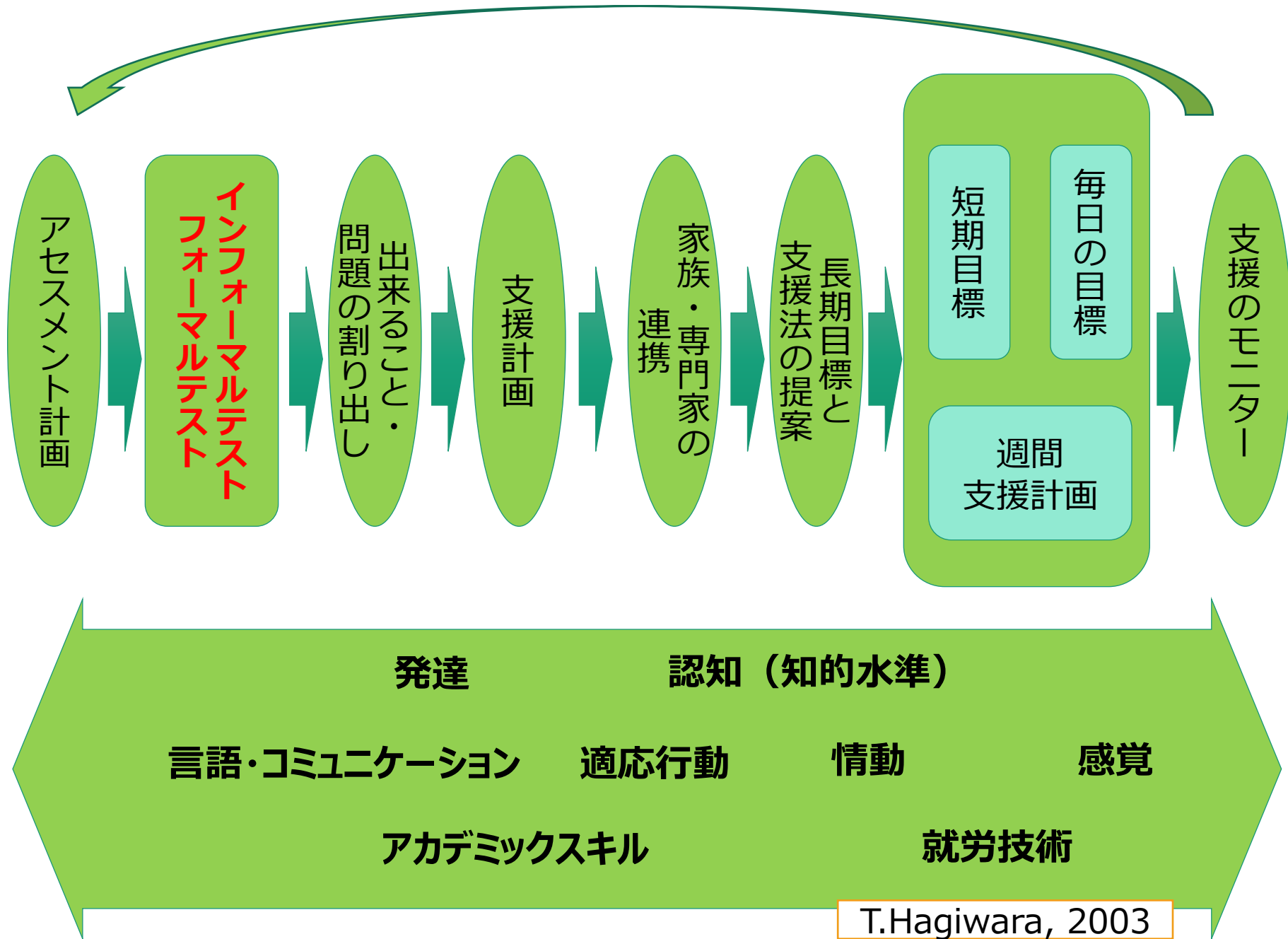


平等



公平

- ◆ 個人の「平等」ではなく、「公平」を実現するために役立つ検査が必要→合理的配慮
- ◆ テストは発達障害の支援の第一歩
- ◆ 日本では、2010年代に入り、ようやく発達障害に特化した検査の整備がほぼ完了  
⇒ 包括的アセスメントの実施が可能



## フォーマル(標準化)アセスメント

発達障害  
特性

ADI-R  
ADOS-2  
CAADID

認知特性

WISC-IV,  
WAIS-III

適応行動

Vineland-II

感覚処理  
特性

感覚  
プロフィール

精神  
疾患

MINI



## インフォーマル(非標準化)アセスメント

観察

記述データ  
数値データ

普通の面接

本人  
家族  
支援者

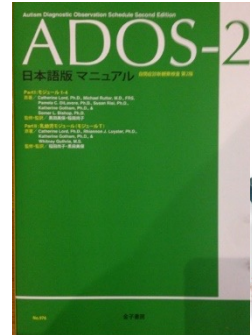
記録

生育歴  
福祉・教育・医療機関  
本人の記述・作品



# 発達障害の検査：自閉スペクトラム症

診断・評価



ADI-R, ADOS-2,  
CARS-2

二次スクリーニング

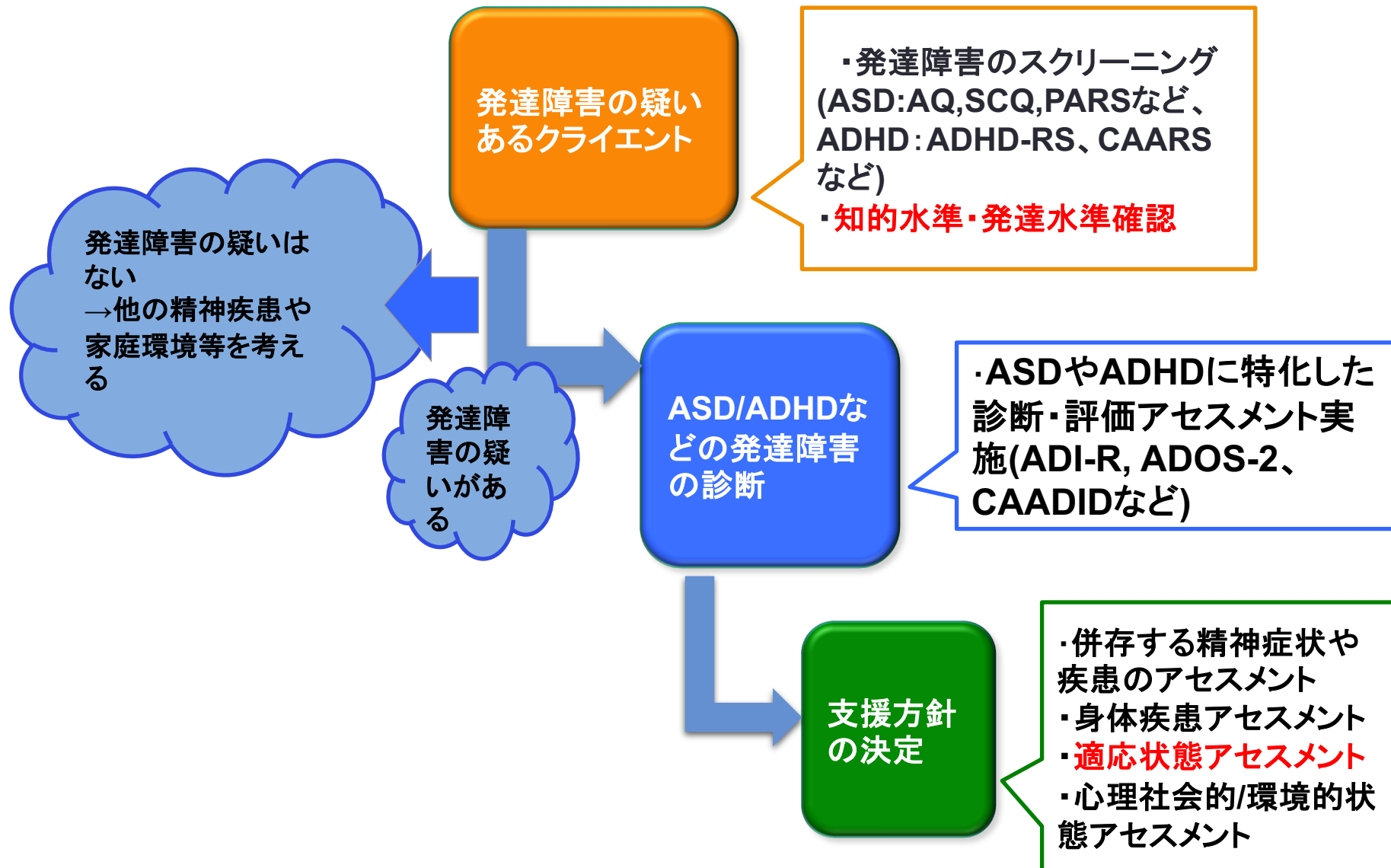


SCQ, PARS-TR,  
SRS-2, AQ

一次スクリーニング



M-CHAT, SCDC



## 2. 支援を考える時に重要な適応行動の検査

Vineland-II適応行動尺度

# 発達障害の診断基準に共通する概念：適応行動

- 発達障害の診断基準に、社会的に適応していない場合に診断をつけるという、社会的にどの程度、適応的に行動できているのかを把握することの重要性が再確認される

症状でなく、適応を見ることが重要

- DSM-5において、知的障害は、神経発達障害の中に位置づけられ、知能指数の数値による知的障害の診断から、相対的な知的能力の高低よりも学力領域・社会性領域・生活自立領域において、現在にどれくらいのレベルで適応できているのかを判定するように改訂された。

# 適応行動とは？不適応行動とは？

## 適応行動

- 社会的、職業的、または他の重要な領域において、**機能的・自立的に行動**すること。
- 日常生活を安全かつ自立的に送るために必要となる**年齢相応のスキル**
- 具体的には、食事、身だしなみ、掃除、お金の管理、仕事、友人関係、社会的スキルなど

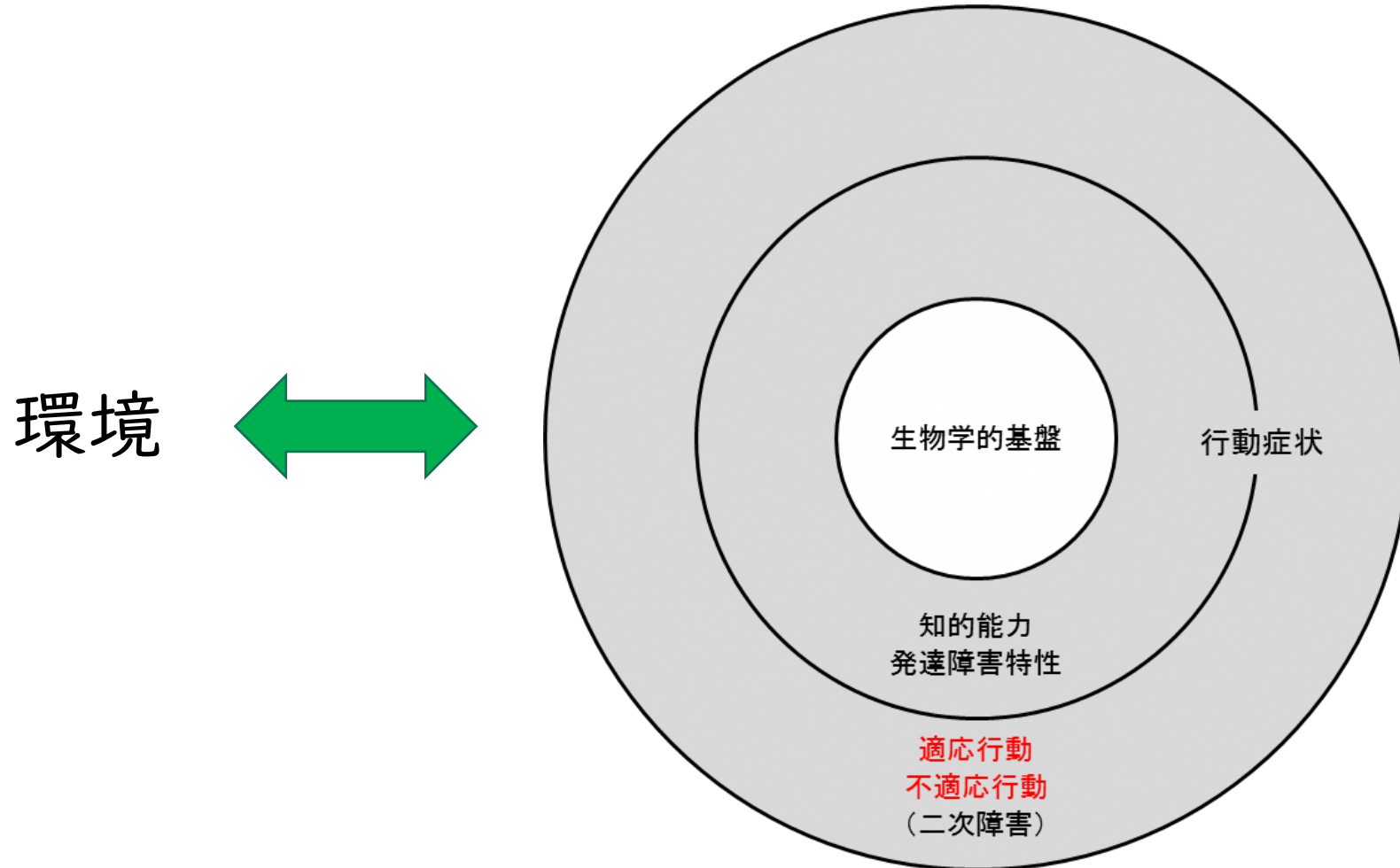
## 不適応行動

- **ストレスへの不適切な対処行動**として表れ、非機能的・非生産的な結果をもたらす行動
- 自傷、引きこもりなどの内在化問題と攻撃、非行、犯罪などの外在化問題

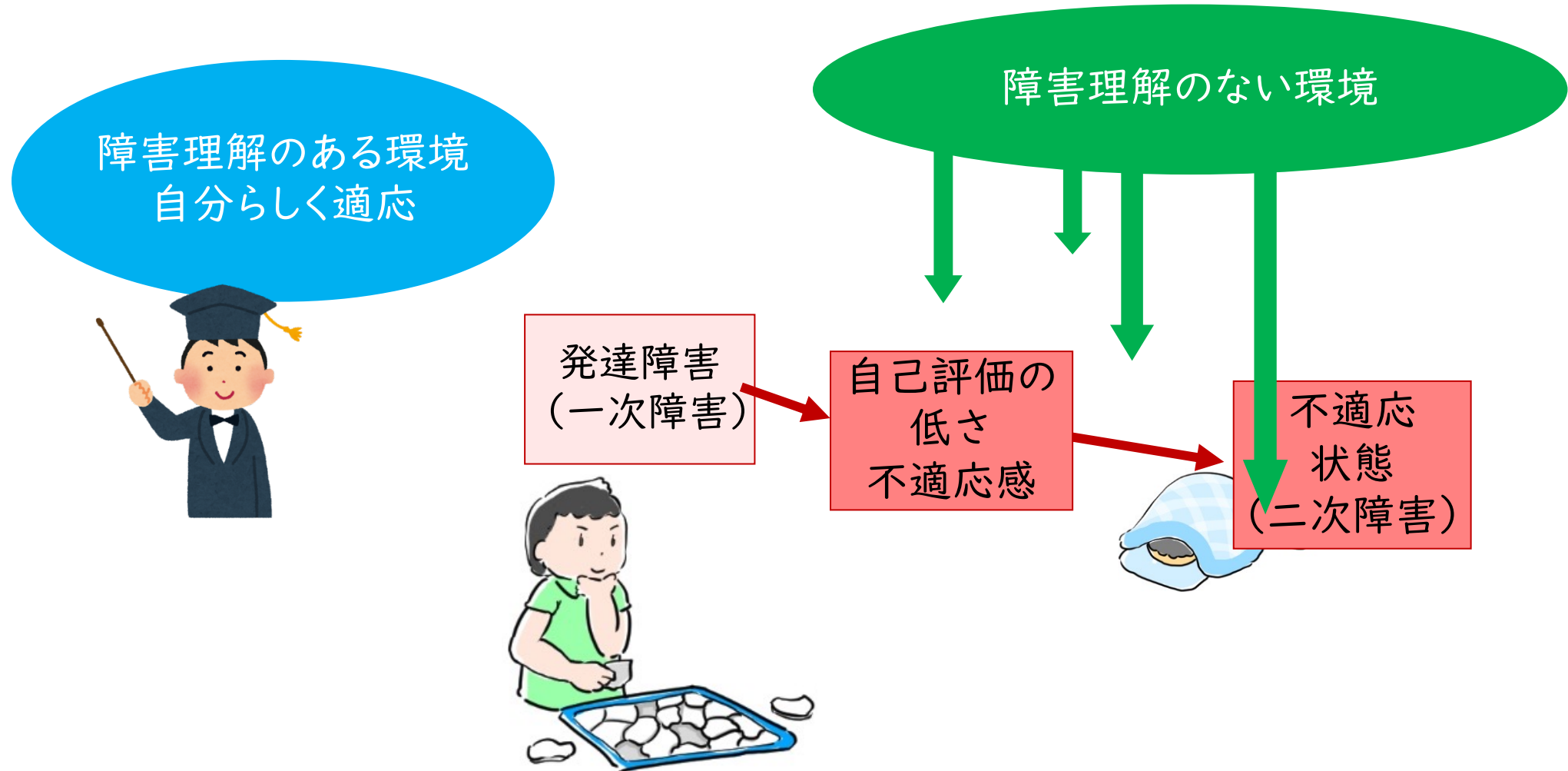
生活機能という連続線上で障害を理解する視点が「適応」

# 適応行動と不適応行動:

生物学的基盤に基づく行動症状がそのまま適応・不適応となるのではない。環境との相互作用。



# 例えば、自閉スペクトラム症の子



# 適応行動と知的機能や知能検査の関係

- 知能検査は、知能や知的な領域の認知特徴を調べるものであって、日常生活における行動を調べるものではない（そもそも調べることができない）。
- 現在、知能検査の下位尺度の凸凹から発達障害かどうかを判断するような間違った使い方も散見される。

⇒ については症状の把握を行うべきであり、支援に必要な情報は学業なら学業、適応状況であれば適応行動から把握すべきである。



# 知的機能と適応行動は異なる

## 知的機能

- 見る、聞く、話す、覚える、考える、など
- 情報処理能力

## 適応行動

- セルフケア、社会性、コミュニケーション、学習や仕事、余暇など
- 環境におけるニーズを自己調整するスキル

## 適応行動と発達特性 発達特性を調べる検査との関係

- 自閉スペクトラム症:ADI-RやADOS等が診断・評価のゴールドスタンダードとされ、わが国でもスクリーニング的な意味でPARS-TRなどが実施されている。しかし、検査で示される重症度が適応状況に直結するわけではない(Klin, etc.)
- ADHDの検査であるADHD-RSやCAARSなどのスクリーニングやConners-3、CAADIDも同じことが言える。SLDの検査でも同じ。

⇒発達特性やその重症度が、適応にそのまま反映するわけではない。  
やはり適応行動の検査が必要。

# ASDにおけるIQと適応行動の関係

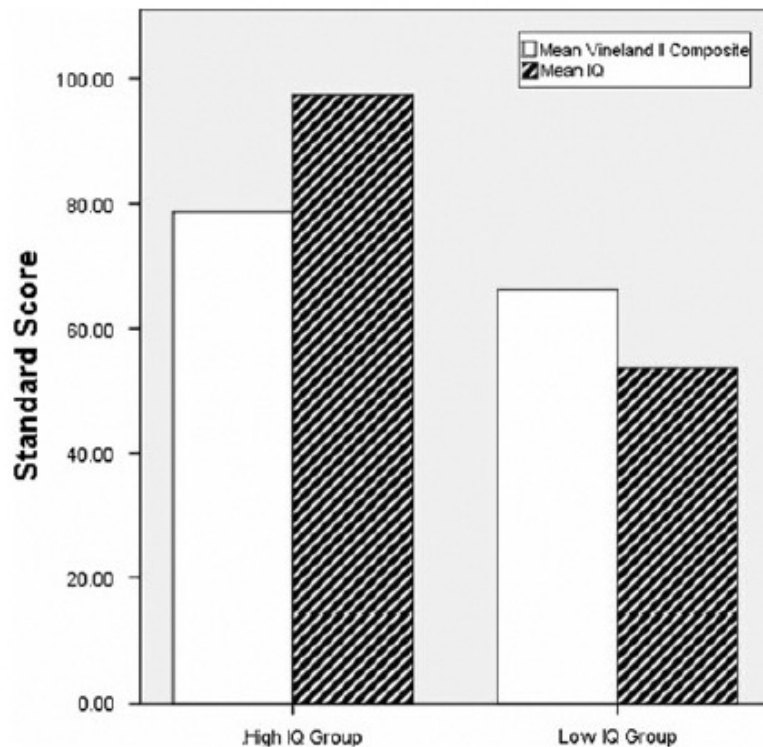


Fig. 4 Graph of mean high and low IQ and Vineland Composite scores

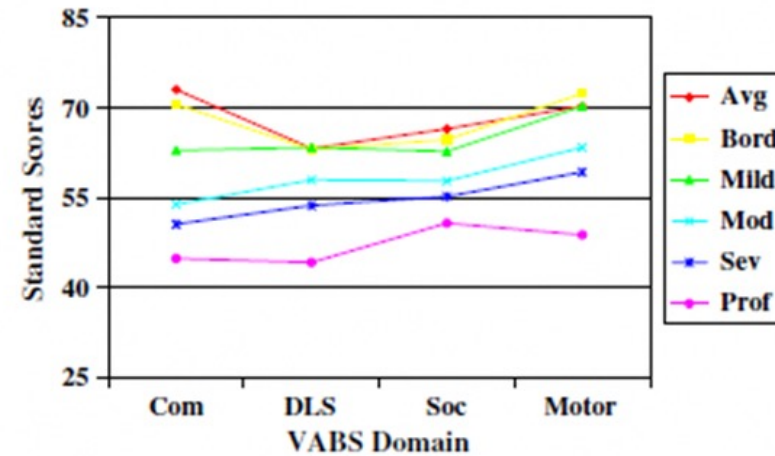
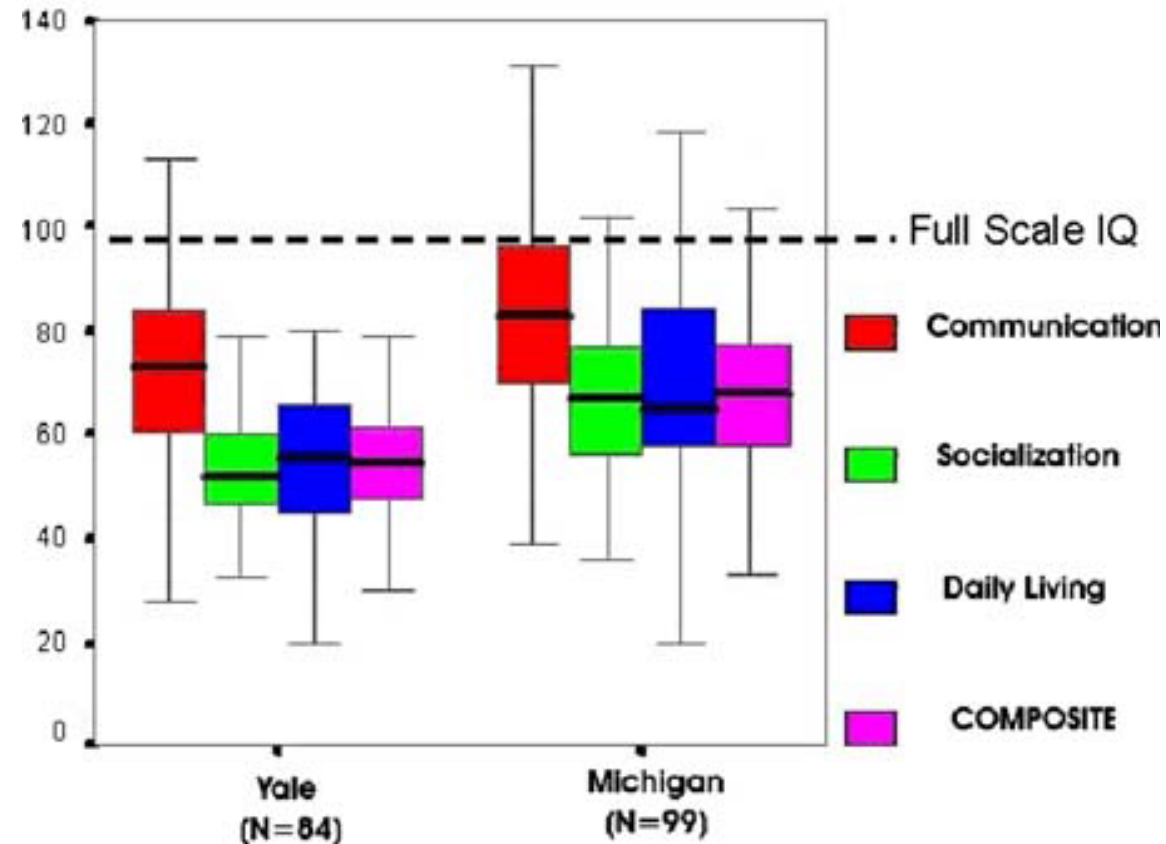


Fig. 1 Profile of VABS standard scores at different levels of cognitive functioning

Brief Report: The Vineland Adaptive Behavior Scales in Young Children with Autism Spectrum Disorders at Different Cognitive Levels  
(Perry A, Flanagan HE, et al 2009)

The Role of Adaptive Behavior in Autism Spectrum Disorders: Implications for Functional Outcome  
(Kanne SM, Gerber AJ, et al 2010)

# ASDの重症度と適応行動の関係 ～Vineland-IIとADOSを用いて～

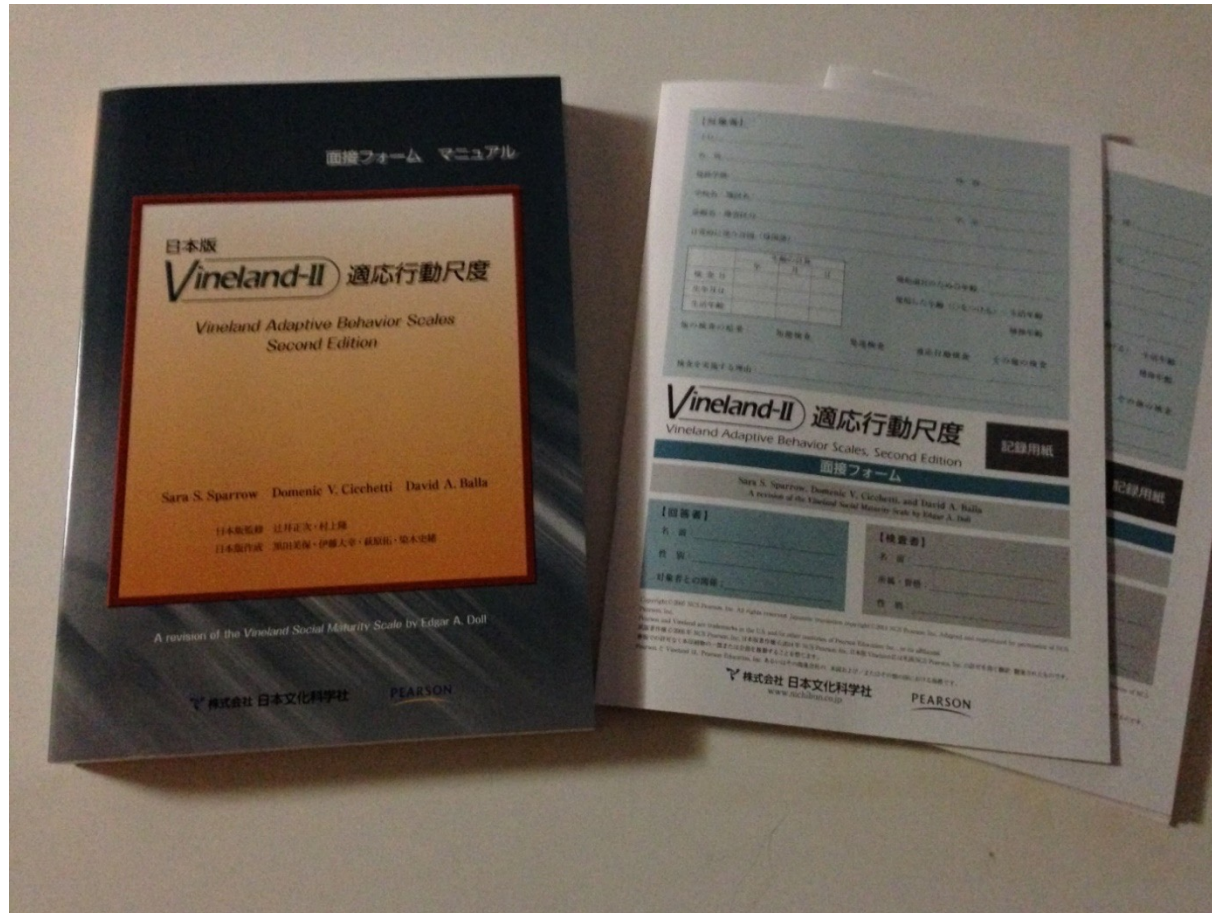


Social and Communication Abilities and Disabilities in Higher Functioning Individuals with Autism Spectrum Disorders: The Vineland and the ADOS (Klin A, Saulnier AC, et al 2007)

# 日本における適応行動の検査

- 日本では発達障害児者の臨床・研究において適応行動を評価する習慣が根づいておらず、知能検査や性格検査によるアセスメントが主流となってきた。
  - 適応行動についての尺度は数少なく、全年齢に利用可能な尺度は開発されてこなかった。
    - **新版S-M社会生活能力検査(三木、1980)(改訂:上野・名越、2016):1~13歳**
    - **ASA旭出式社会適応スキル検査(肥田野、2012):幼稚園~高校**
- 不適応行動の評価にはCBCL、SDQ、ABC-Jなどの質問紙尺度が利用されているが、面接形式で信頼性・妥当性の確認された尺度はない。

# 日本版Vineland-II (ヴァインランド) 適応行動尺度



日本文化科学社「日本版Vineland-II  
適応行動尺度」  
マニュアル、記録用紙の画像  
日本文化科学社より許可を得て掲載



# Vineland適応行動尺度の歴史

- 1888年 *The Training School at Vineland* 創立
- リサーチディレクターのDollにより適応行動を調べるために作られたのが、*Vineland Social Maturity Scale, VSMS* (1935年)
- Dollは、適応行動の重要性を早くから認識し、1917年には知的なハンディ(*Feeble-Mindedness*)を生じさせる要因として社会的な機能不全を位置付ける。

第1次世界大戦時に米軍で志願兵の知能検査等を行い、その後受刑者の知能検査等を行い、兵士たちに知的に低い者想像以上に多かったことから、知能だけで正しい適応評価はできないことを明確にした。

- **Edgar A. Doll**



- Vineland SMSを基に、Dr. Sparrow, Cicchetti, & Balla, が  
1984年にThe Vineland Adaptive Behavior Scales  
(Vineland ABS)を開発。  
1980年米国国勢調査データ分布に基づいた  
15の年齢群にわたる3000人から標準化された。
- Vineland ABSの改訂版が *Vineland-II* 適応行動尺度  
2001年米国国勢調査の人種・民族性、地域規模、地理的地域、社会  
経済的地位（母親の教育歴から測定）に合わせた  
3695名のサンプルによって標準化された。



Sparrow先生, Cicchetti先生と黒田  
@イェール大学チャイルドスタディーセンター



# 日本版Vineland-IIの 標準化・信頼性・妥当性

# 項目の改訂

番号	変更前	変更後
表出言語		
32	現在進行形を使う	進行中の出来事や物事の状態を表したいときに「～ている」を使う（例えば、「雨がふっている」「おじさんが走っている」など）
34	代名詞を使う，性別にあった代名詞を使う必要があるが，文が文法的に正しい必要はない	代名詞を使う（例えば、「ぼくがやった」「これ，ください」など）；文が文法的には正確でなくてもよい
36	規則動詞の過去形を使う，不規則動詞は，文法的に誤って使うかもしれない	現在と過去を区別して表現する（例えば、「昨日，遊園地へ行った」「今日は幼稚園がある」など）
50	不規則の複数形を使う	助数詞をほぼ正しく使う（例えば、「1頭」「2羽」「車が3台」など）
読み書き		
1	1個のアルファベットを文字とわかり数字を区別する	1個以上の平仮名を文字とわかり数字と区別する
6	全ての活字体の大文字と小文字のアルファベットがわかる	すべての平仮名がわかる
9	追加	「がっこう」などの促音や「あそんだ」などの撥音が読める
10	少なくとも10の単語を声を出して読む	少なくとも10の漢字を覚えて書く
12	追加	50以上の漢字を覚えて書く
14	追加	「～は (wa)」「～へ (e)」といった特殊な読み方ができる
15	アルファベット順に単語を並べる	あいうえお順に単語を並べる
身辺自立		
18	正しくスプーン・フォーク・ナイフを使う	箸で食べる；こぼしてもよい，持ち方は問わない
29	追加	こぼさないで箸が使える；握り箸ではない

# サンプリング

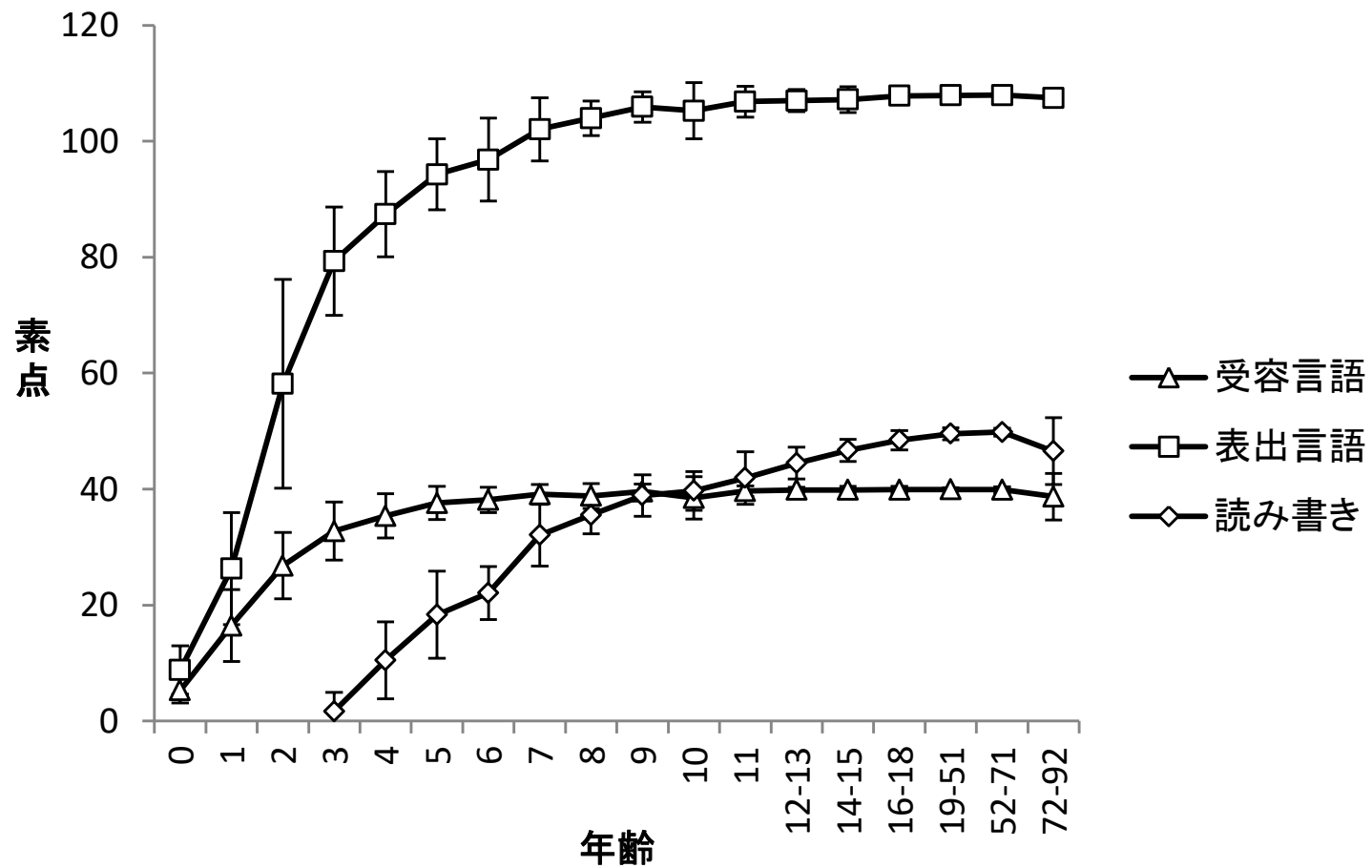
年齢区分	男性	女性	合計	充足率
0:0	8	8	16	80%
0:1	11	15	26	130%
0:2	6	9	15	75%
0:3	8	7	15	75%
0:4	10	9	19	95%
0:5	7	10	17	85%
0:6	12	13	25	125%
0:7	9	8	17	85%
0:8	7	6	13	65%
0:9	12	7	19	95%
0:10	8	7	15	75%
0:11	11	14	25	125%
1:0	11	9	20	100%
1:1	10	11	21	105%
1:2	12	15	27	135%
1:3	7	7	14	70%
1:4	11	9	20	100%
1:5	9	6	15	75%
1:6	11	9	20	100%
1:7	12	10	22	110%
1:8	9	11	20	100%
1:9	13	7	20	100%
1:10	9	6	15	75%
1:11	5	5	10	50%

年齢区分	男性	女性	合計	充足率
2:0-2:1	13	13	26	217%
2:2-2:3	5	5	10	83%
2:4-2:5	5	7	12	100%
2:6-2:7	5	4	9	75%
2:8-2:9	6	4	10	83%
2:10-2:11	5	5	10	83%
3:0-3:1	5	7	12	100%
3:2-3:3	5	6	11	92%
3:4-3:5	6	5	11	92%
3:6-3:7	5	5	10	83%
3:8-3:9	8	7	15	125%
3:10-3:11	2	5	7	58%
4:0-4:1	5	6	11	92%
4:2-4:3	5	10	15	125%
4:4-4:5	7	8	15	125%
4:6-4:7	6	9	15	125%
4:8-4:9	5	8	13	108%
4:10-4:11	4	3	7	58%
5:0-5:1	5	4	9	75%
5:2-5:3	5	5	10	83%
5:4-5:5	5	3	8	67%
5:6-5:7	7	4	11	92%
5:8-5:9	4	4	8	67%
5:10-5:11	6	4	10	83%

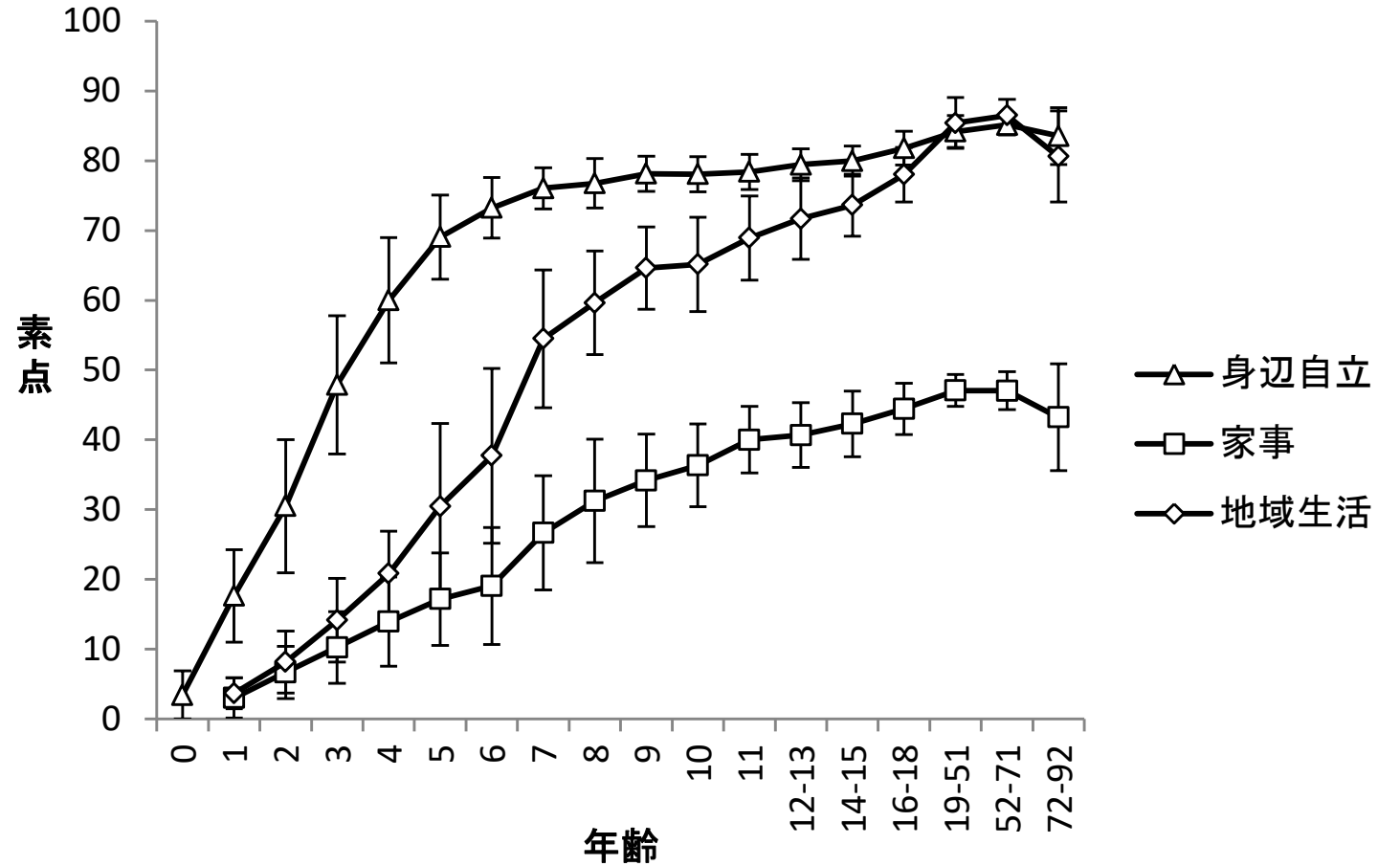
年齢区分	男性	女性	合計	充足率
6:0-6:2	7	8	15	125%
6:3-6:5	8	7	15	125%
6:6-6:8	8	1	9	75%
6:9-6:11	8	4	12	100%
7:0-7:2	3	6	9	75%
7:3-7:5	5	6	11	92%
7:6-7:8	3	5	8	67%
7:9-7:11	7	7	14	117%
8:0-8:2	4	5	9	75%
8:3-8:5	8	4	12	100%
8:6-8:8	7	8	15	125%
8:9-8:11	4	5	9	75%
9:0-9:3	4	7	11	92%
9:4-9:7	11	2	13	108%
9:8-9:11	11	12	23	192%
10:0-10:3	6	3	9	75%
10:4-10:7	6	5	11	92%
10:8-10:11	5	7	12	100%
11:0-11:3	8	4	12	100%
11:4-11:7	7	6	13	108%
11:8-11:11	9	8	17	142%
12:0-12:3	8	4	12	100%
12:4-12:7	8	8	16	133%
12:8-12:11	7	5	12	100%

年齢区分	男性	女性	合計	充足率
13:0-13:5	6	7	13	108%
13:6-13:11	10	9	19	158%
14:0-14:5	4	3	7	58%
14:6-14:11	6	8	14	117%
15:0-15:5	6	4	10	83%
15:6-15:11	3	8	11	92%
16:0-16:5	5	6	11	92%
16:6-16:11	8	5	13	108%
17:0-17:5	4	4	8	67%
17:6-17:11	4	5	9	75%
18:0-18:5	6	4	10	83%
18:6-18:11	3	4	7	58%
19-21	11	17	28	93%
22-29	27	22	49	163%
30-39	15	13	28	93%
40-49	7	13	20	67%
50-54	6	10	16	53%
55-59	9	7	16	53%
60-64	3	6	9	30%
65-69	5	3	8	27%
70-79	10	9	19	63%
80-92	8	14	22	73%
合計	690	677	1367	91%

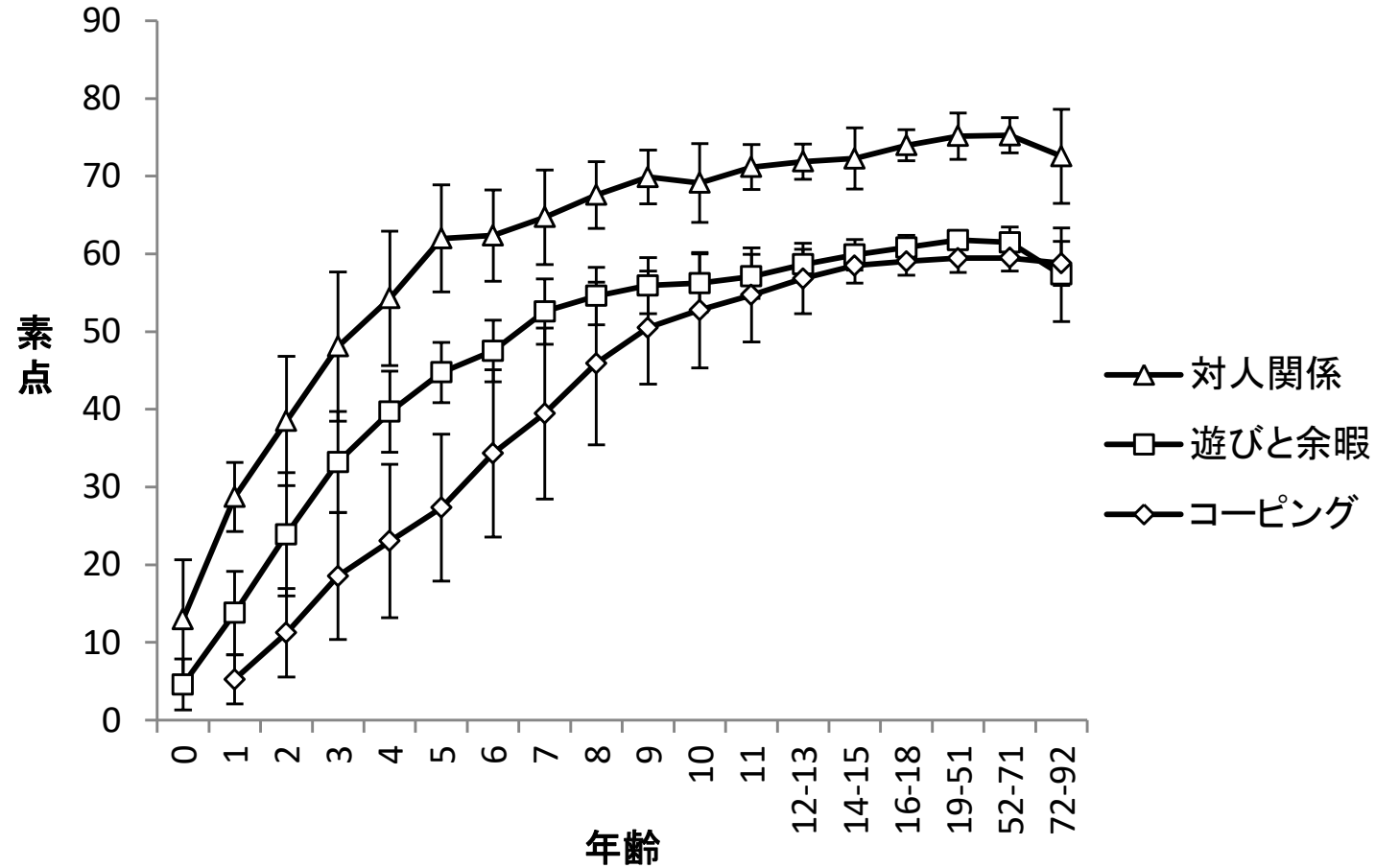
# 基準値の算出 コミュニケーション



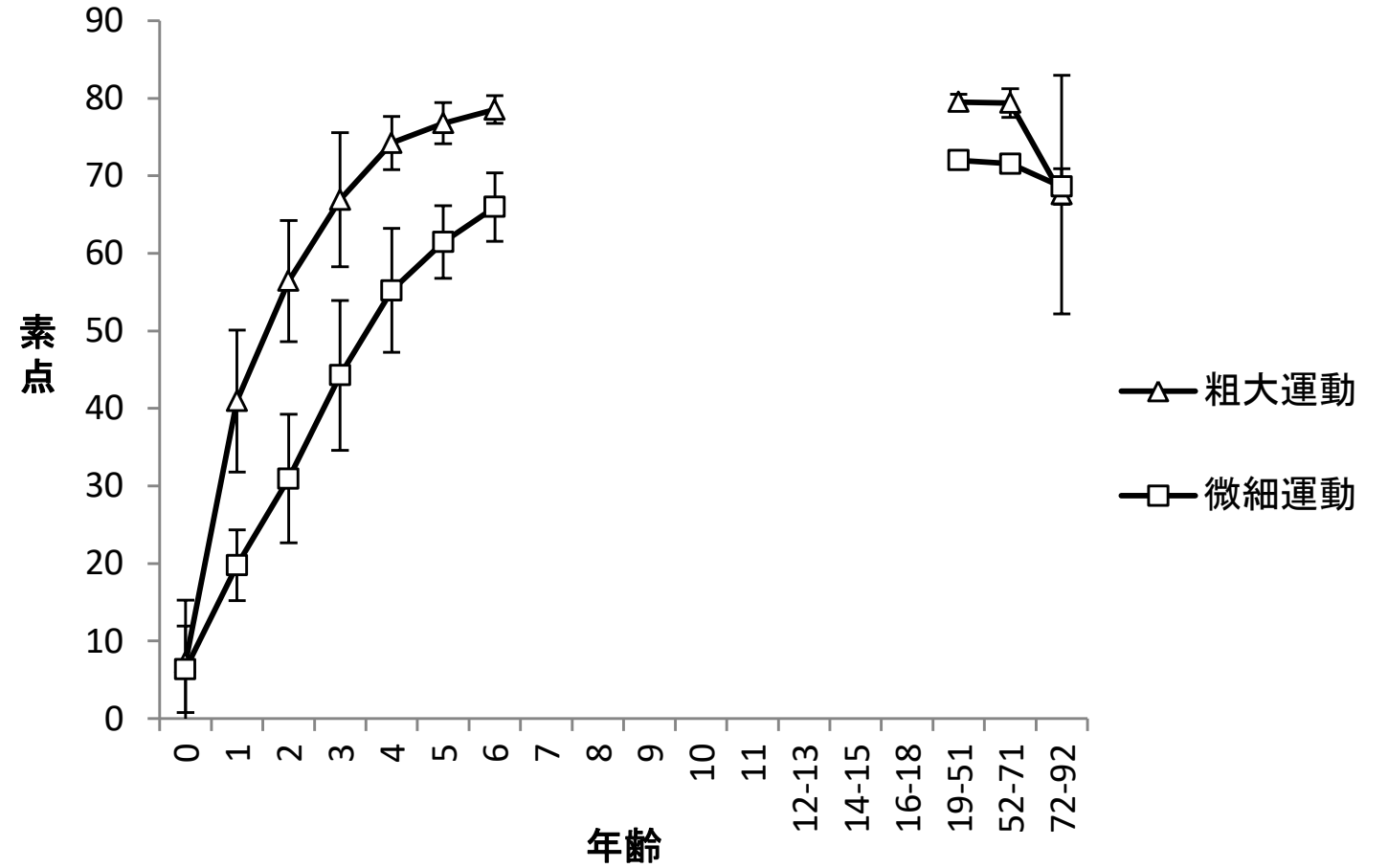
# 基準値の算出 日常生活スキル



# 基準値の算出 社会性



# 基準値の算出 運動スキル





# 内的整合性 ( $\alpha$ 係数)

	コミュニ ケーション	受容 言語	表出 言語	読み 書き	日常生活 スキル	身辺 自立	家事	地域	社会性	対人 関係	遊び と余暇	コー ピング	運動 スキル	粗大 運動	微細 運動	適応行動 総合点
0	.76	.62	.76		.72	.72			.86	.88	.72		.90	.90	.82	.90
1	.91	.86	.91		.79	.85	.66	.47	.86	.77	.80	.66	.85	.90	.74	.94
2	.93	.84	.95		.87	.90	.71	.76	.94	.89	.88	.82	.90	.86	.88	.97
3	.90	.81	.89	.79	.91	.88	.78	.80	.94	.89	.83	.87	.93	.90	.90	.97
4	.89	.75	.85	.86	.92	.87	.85	.78	.93	.88	.77	.90	.80	.64	.87	.96
5	.88	.74	.83	.89	.93	.81	.84	.92	.90	.84	.68	.89	.76	.57	.73	.94
6	.86	.62	.86	.73	.93	.71	.89	.92	.88	.81	.65	.91	.62	.57	.74	.93
7	.87	.68	.81	.82	.91	.60	.88	.90	.90	.83	.70	.92				.94
8	.81	.73	.60	.67	.93	.76	.90	.86	.88	.73	.68	.92				.94
9	.79	.71	.67	.68	.86	.55	.86	.81	.84	.68	.70	.87				.91
10	.87	.87	.86	.68	.86	.55	.83	.83	.87	.81	.72	.89				.93
11	.82	.54	.76	.79	.85	.55	.80	.82	.82	.60	.62	.88				.91
12-13	.73	.54	.68	.61	.81	.55	.79	.81	.79	.61	.46	.85				.88
14-15	.63	.54	.68	.49	.81	.55	.81	.74	.74	.80	.46	.65				.82
16-18	.62	.54	.68	.49	.80	.55	.74	.74	.80	.80	.46	.69				.86
19-21	.59	.54	.68	.49	.78	.55	.79	.71	.85	.80	.66	.80				.88
22-31	.62	.54	.68	.49	.83	.67	.79	.71	.82	.81	.66	.80				.86
32-51	.63	.54	.68	.49	.66	.67	.79	.71	.88	.81	.66	.80				.92
52-71	.65	.54	.68	.49	.74	.67	.79	.71	.85	.81	.66	.80	.72	.69	.63	.80
72-92	.93	.95	.68	.91	.91	.67	.93	.84	.95	.90	.87	.88	.85	.96	.63	.97

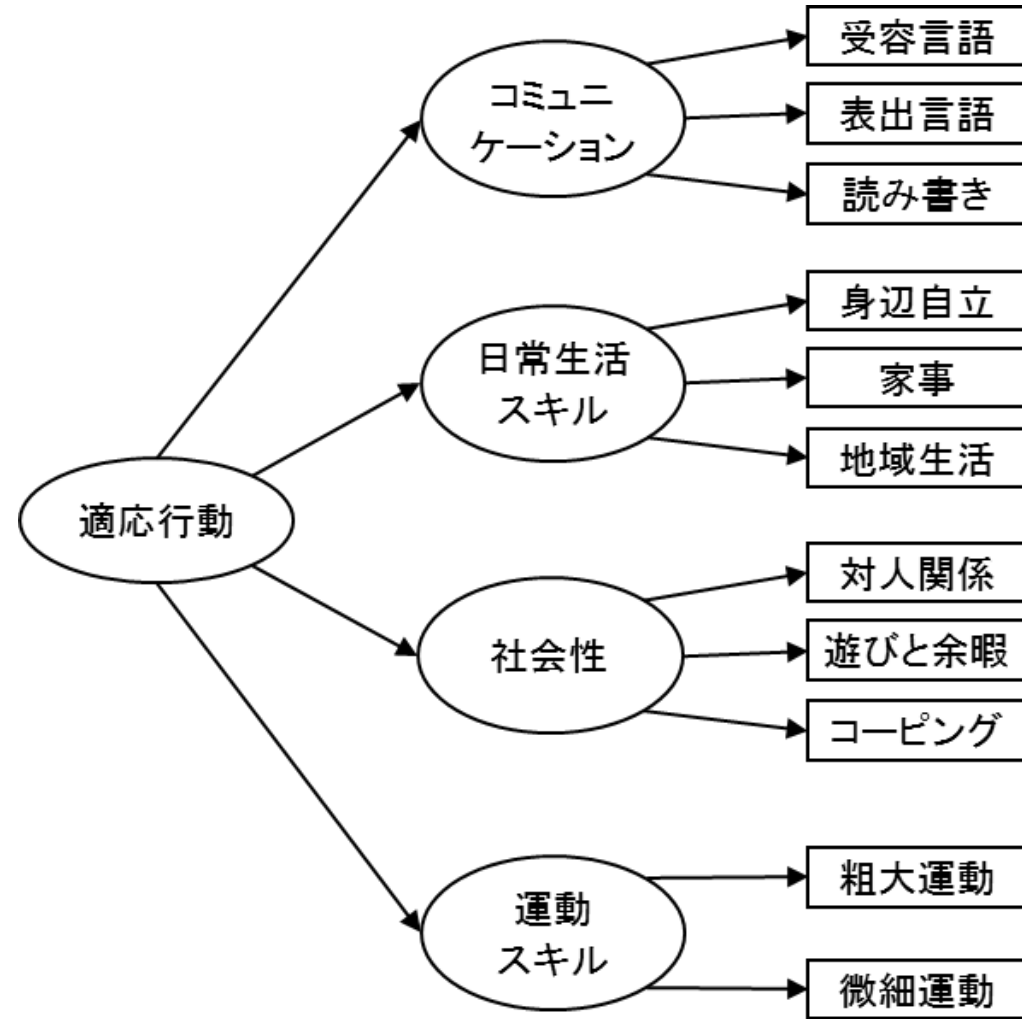
# 內的整合性 ( $\alpha$ 係數)

	內在化 問題	外在化 問題	不適應行動 指標
3-5歲	.88	.86	.91
6-11歲	.76	.77	.83
12-18歲	.55	.73	.76
19-39歲	.78	.79	.84
40-92歲	.78	.83	.86

# 再検査・評定者間信頼性

	再検査信頼性			評定者間信頼性	
	級内相関	95% CI		級内相関	95% CI
コミュニケーション	.81	.67-.88	コミュニケーション	.82	.62-.91
受容言語	.76	.61-.85	受容言語	.82	.62-.91
表出言語	.85	.74-.91	表出言語	.75	.49-.88
読み書き	.70	.49-.83	読み書き	.72	.37-.88
日常生活スキル	.80	.65-.88	日常生活スキル	.89	.75-.95
身辺自立	.67	.47-.79	身辺自立	.56	.20-.78
家事	.89	.80-.93	家事	.95	.86-.97
地域生活	.77	.61-.87	地域生活	.77	.49-.90
社会性	.78	.63-.87	社会性	.65	.31-.83
対人関係	.80	.67-.88	対人関係	.60	.26-.81
遊びと余暇	.71	.53-.82	遊びと余暇	.60	.24-.80
コーピング	.62	.39-.77	コーピング	.68	.33-.86
運動スキル	.78	.62-.87	運動スキル	.73	.42-.88
粗大運動	.68	.48-.81	粗大運動	.88	.72-.95
微細運動	.84	.73-.90	微細運動	.71	.39-.87
適応行動総合点	.81	.68-.89	適応行動総合点	.87	.70-.94
	再検査信頼性			評定者間信頼性	
	級内相関	95% CI		級内相関	95% CI
内在化問題	.63	.39-.78	内在化問題	.82	.55-.93
外在化問題	.61	.36-.77	外在化問題	.52	.04-.79
不適応行動指標	.68	.46-.82	不適応行動指標	.62	.18-.85

# 確認的因子分析

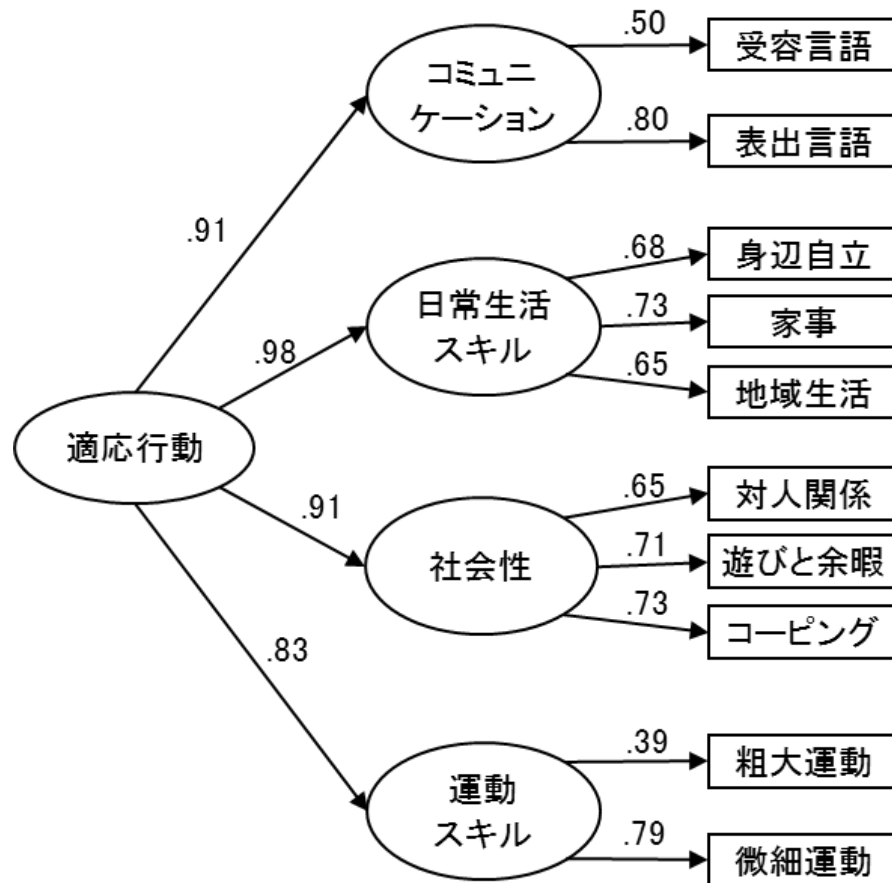


# 確認的因子分析

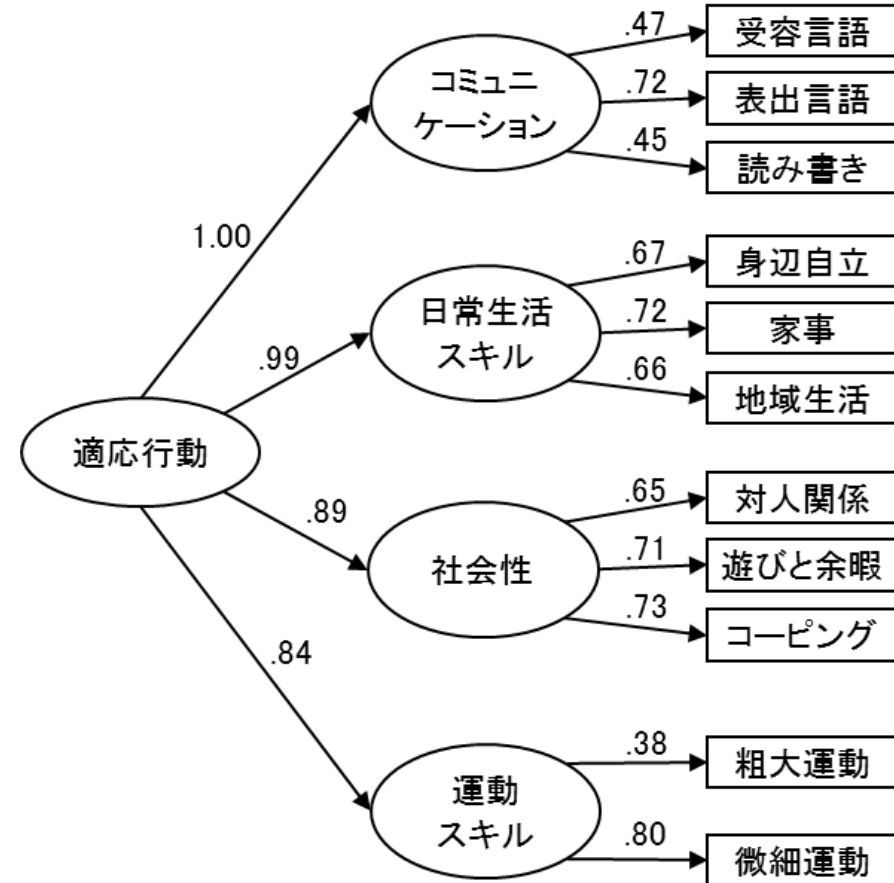
	$\chi^2$	df	p	CFI	RMSEA	AIC	改善度		
							$d\chi^2$	ddf	p
0-2歳 (n=523)									
独立モデル	1012.5	45	<.001		.203	1052.5			
一次因子モデル	109.8	35	<.001	.922	.064	169.8	902.6	10	<.001
二次因子モデル	68.0	31	<.001	.961	.048	136.0	41.8	4	<.001
3-6歳 (n=249)									
独立モデル	945.5	55	<.001		.256	989.5			
一次因子モデル	136.8	44	<.001	.895	.092	202.8	808.8	11	<.001
二次因子モデル	116.6	40	<.001	.913	.088	190.6	20.1	4	.002
7-15歳 (n=322)									
独立モデル	584.0	36	<.001		.218	620.0			
一次因子モデル	115.2	27	<.001	.836	.101	169.2	468.8	9	<.001
二次因子モデル	85.5	24	<.001	.886	.089	145.5	29.7	3	<.001
16-92歳 (n=273)									
独立モデル	595.8	36	<.001		.239	631.8			
一次因子モデル	110.9	27	<.001	.848	.107	164.9	484.9	9	<.001
二次因子モデル	85.6	24	<.001	.888	.097	145.6	25.3	3	<.001

# 確認的因子分析

【0-2歳】

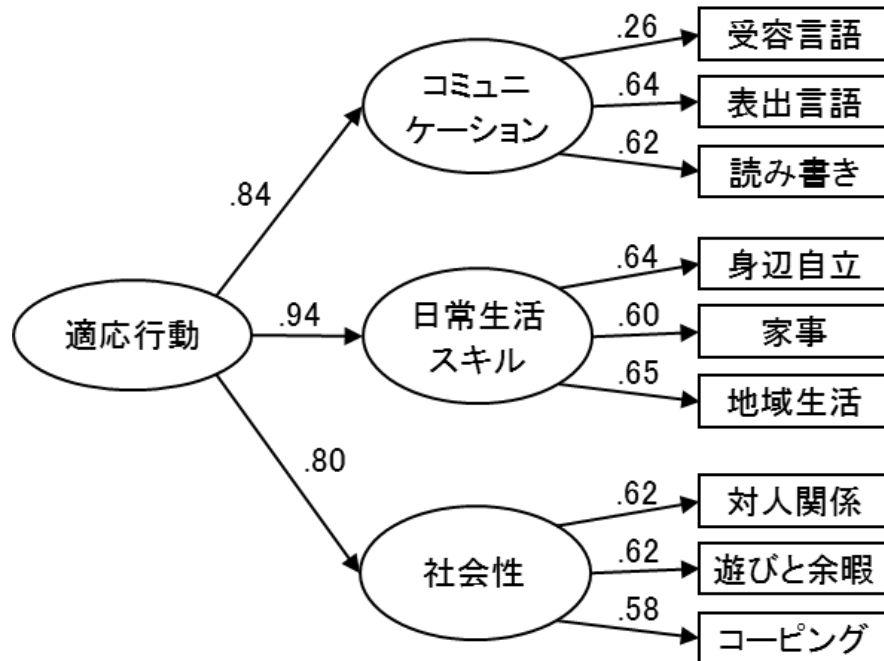


【3-6歳】

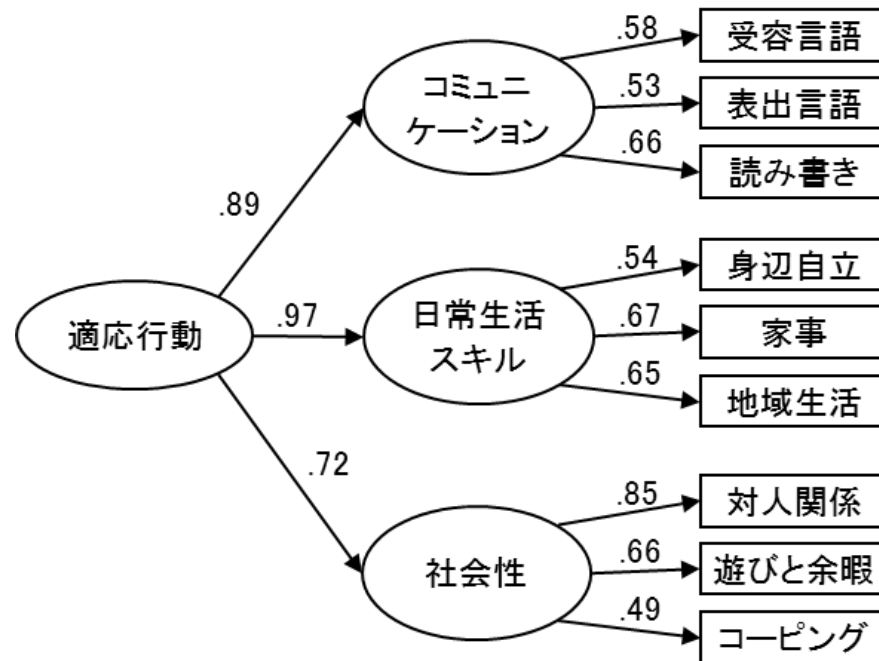


# 確認的因子分析

【7-15歳】



【16-92歳】



# 併存的妥当性

Vineland-II 適応行動尺度	旭出式社会適応スキル検査				総得点
	言語 スキル	日常生活 スキル	社会生活 スキル	対人関係 スキル	
コミュニケーション	.580 **	.420 *	.344	.181	.389 *
受容言語	.316	.015	-.348	-.208	-.143
表出言語	.387	.277	.433 *	.145	.341
読み書き	.504 **	.485 *	.407 *	.305	.459 *
日常生活スキル	.286	.371	.405 *	.185	.347
身辺自立	-.095	.185	.296	.113	.174
家事	.317	.328	.367	.160	.319
地域生活	.502 *	.382	.392	.196	.386
社会性	.341	.476 *	.668 ***	.516 **	.598 **
対人関係	.237	.543 **	.714 ***	.569 **	.633 ***
遊びと余暇	.477 *	.483 *	.609 **	.467 *	.583 **
コーピング	.237	.262	.504 *	.364	.417 *
運動スキル	.573 **	.612 **	.405	.581 **	.595 **
粗大運動	.357	.515 *	.293	.526 *	.477 *
微細運動	.309	.151	.213	.221	.246
適応行動総合点	.498 *	.583 **	.597 **	.443 *	.596 **
内在化問題	-.052	-.114	.159	.073	.049
外在化問題	-.017	-.089	.203	-.050	.031
不適応行動指標	-.181	-.194	.211	-.076	-.029



Vineland-II 適応行動尺度	CBCL		
	内向	外向	総得点
コミュニケーション	-.355 *	-.378 **	-.397 **
受容言語	-.135	-.279 *	-.248
表出言語	-.059	-.054	-.072
読み書き	-.334 *	-.216	-.251
日常生活スキル	-.281	-.219	-.250
身辺自立	-.158	-.170	-.174
家事	-.337 *	-.269	-.314 *
地域生活	-.162	.010	-.019
社会性	-.123	.006	-.012
対人関係	-.250	-.064	-.112
遊びと余暇	.028	.016	.057
コーピング	-.077	.020	.004
運動スキル	-.083	-.291 *	-.244
粗大運動	-.007	-.271	-.140
微細運動	-.161	-.173	-.197
適応行動総合点	-.410 **	-.356 *	-.389 **
内在化問題	.683 ***	.406 **	.611 ***
外在化問題	.302	.620 ***	.480 **
不適応行動指標	.574 ***	.654 ***	.643 ***

## まとめ

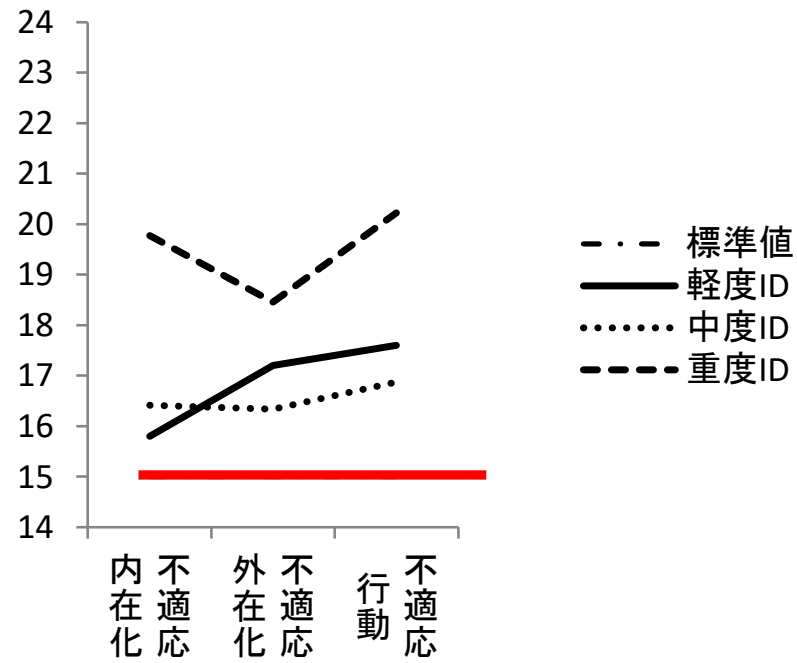
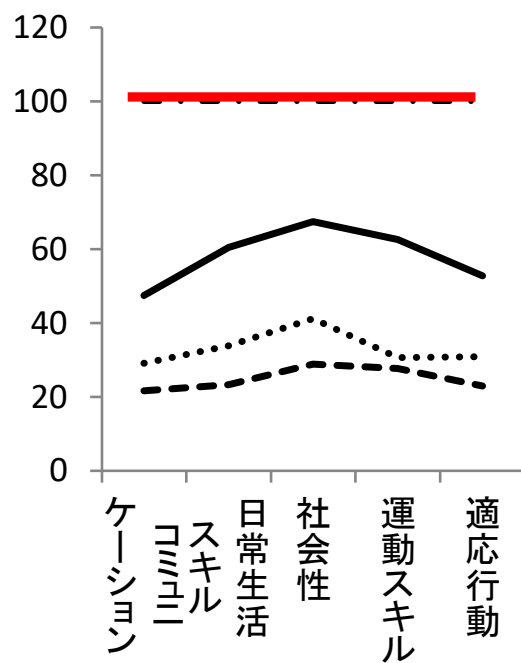
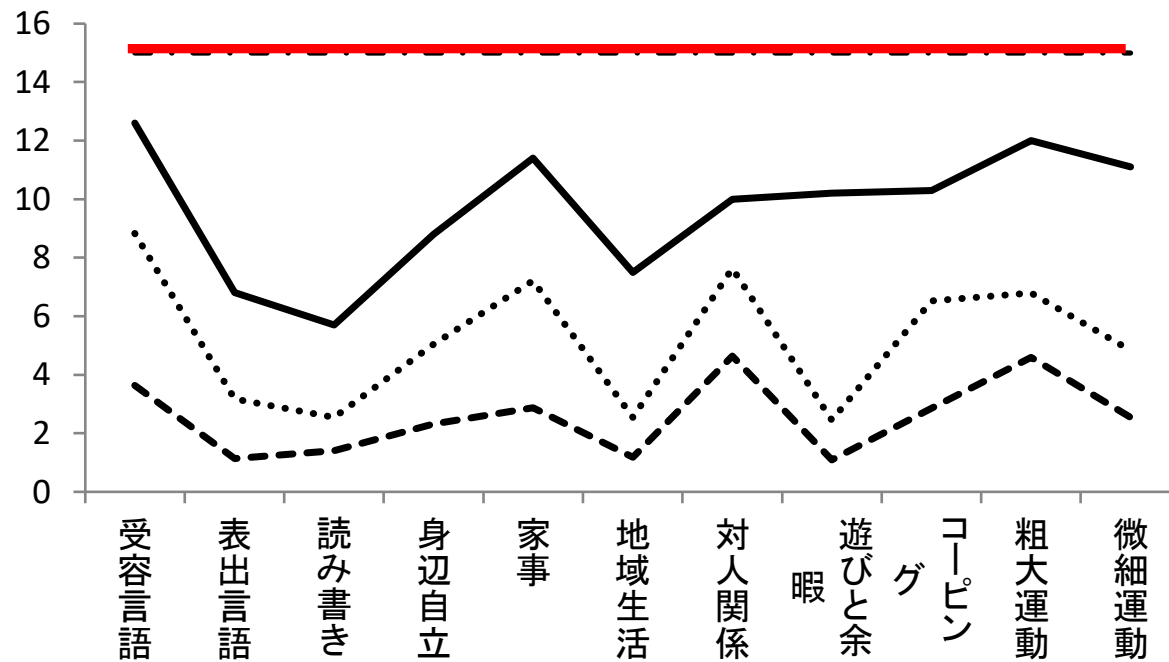
- 0~92歳までの計1367名のサンプルに基づいて、日本版Vineland-IIの各年齢区分ごとの基準値が開発された
- 内的整合性、再検査信頼性、検査者間信頼性の観点から、日本版Vineland-IIの信頼性が確認された
- 確認的因子分析、他の尺度との相関、臨床群のスコアプロフィールから、日本版Vineland-IIの構成概念妥当性が支持された

# 日本版 Vineland-II にみられる発達障害の特徴 (参加者の基本データ)

	<i>n</i>			Age		IQ	
	Men	Women	Total	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
ID							
Mild	8	2	10	14.4	(3.2)	61.9	(5.2)
Moderate	16	8	24	21.4	(14.1)	40.2	(5.6)
Severe	16	6	22	34.1	(19.4)	24.2	(7.0)
ASD							
without ID	96	16	112	12.6	(4.3)	100.3	(16.4)
with Mild ID	22	5	27	11.7	(4.9)	61.1	(6.8)
with Moderate ID	28	8	36	13.3	(6.2)	43.8	(4.4)
with Severe ID	14	6	20	18.4	(7.4)	25.8	(6.4)
ADHD	22	3	25	12.5	(4.8)	101.2	(18.5)
Total	222	54	276	14.6	(9.3)	79.1	(31.6)

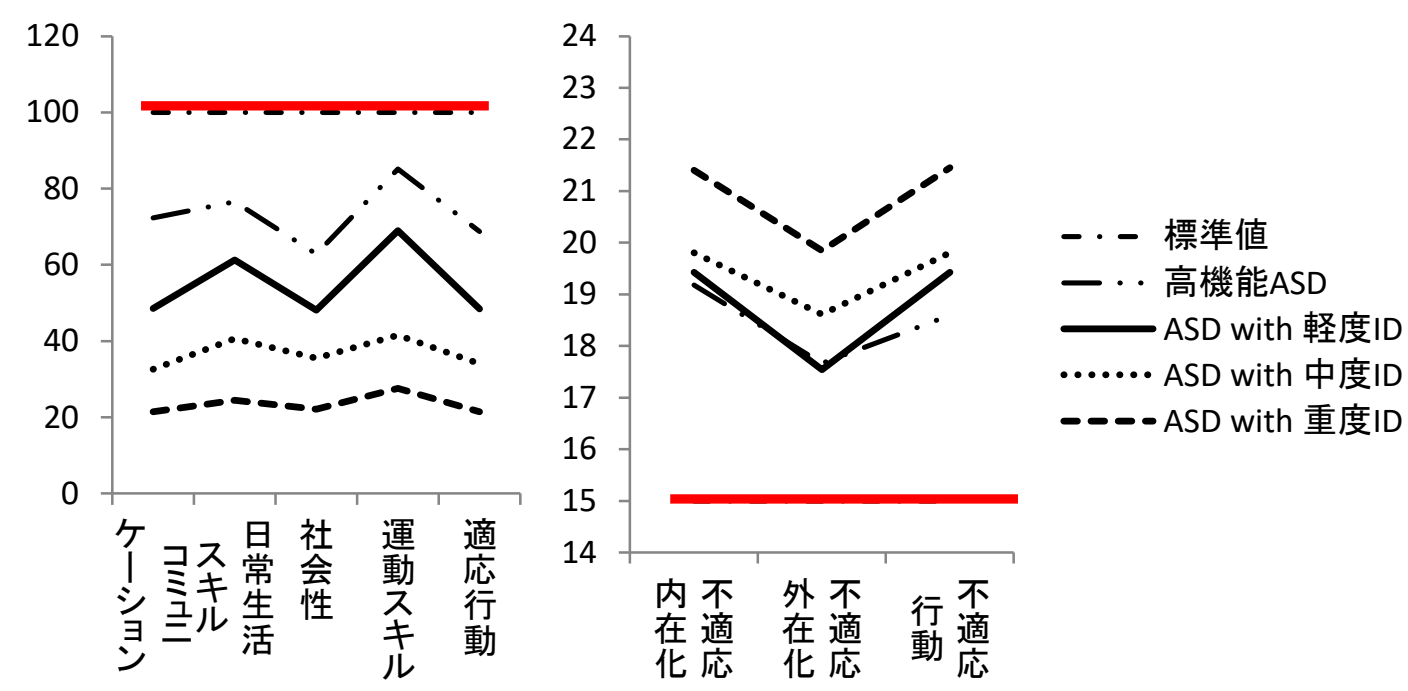
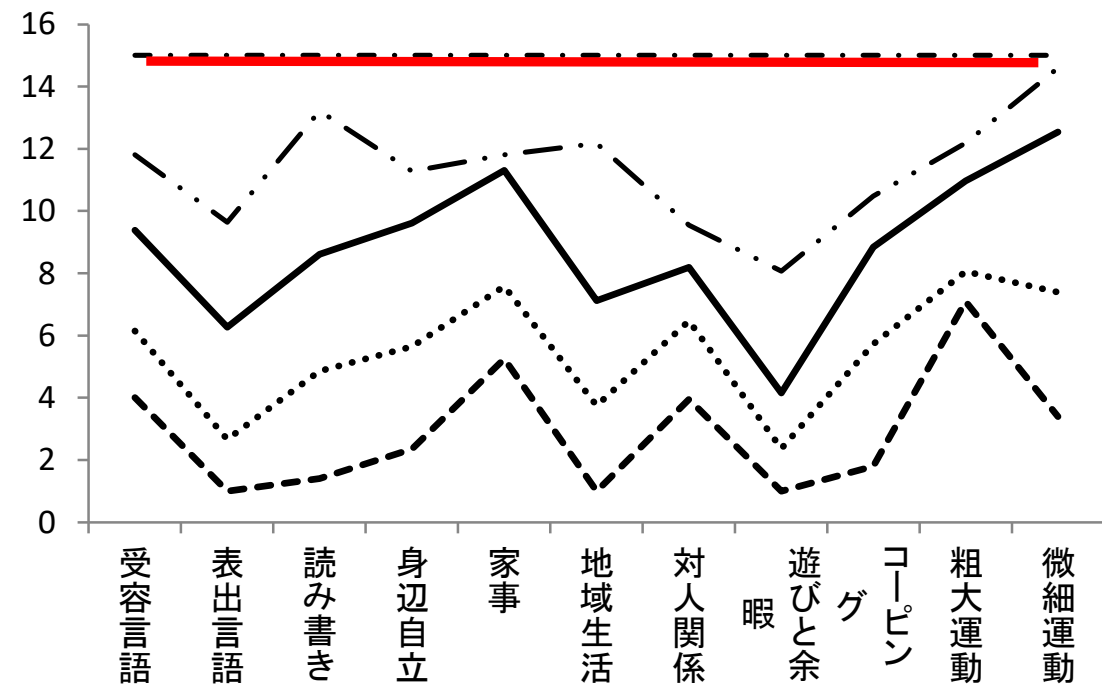
ID: Intellectual Disability, ASD: Autism Spectrum Disorder, ADHD: Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder, IQ: Intelligence Quotient

# ID

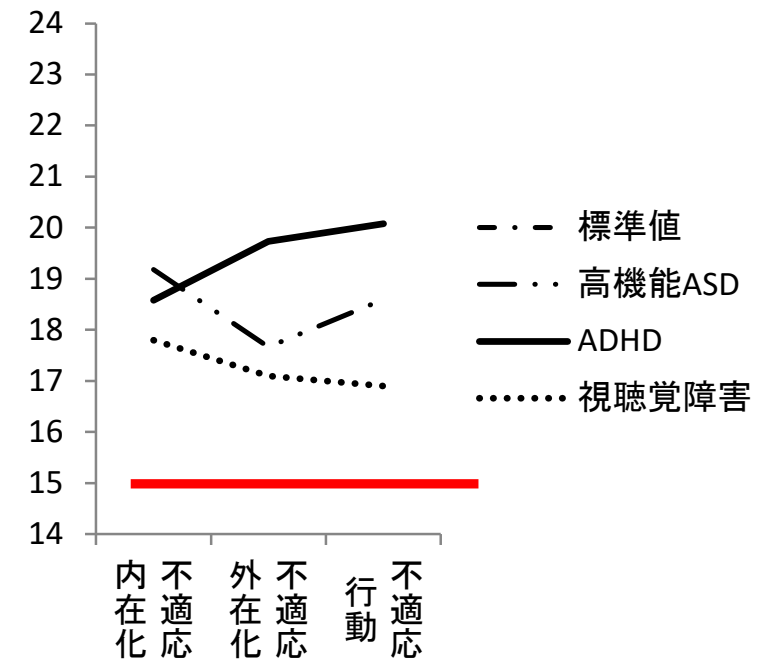
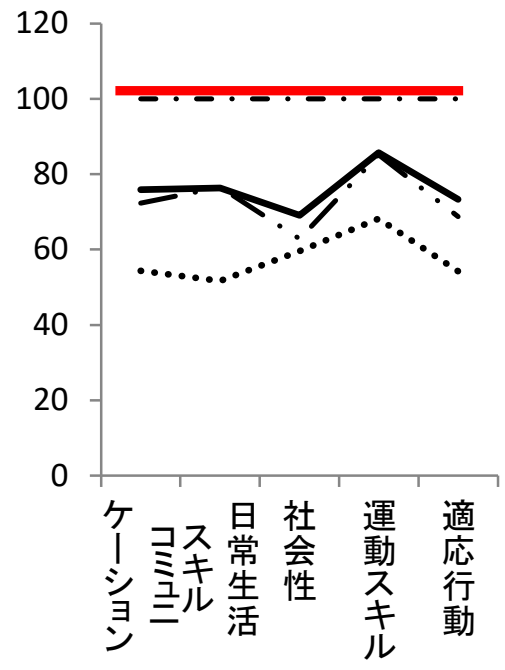
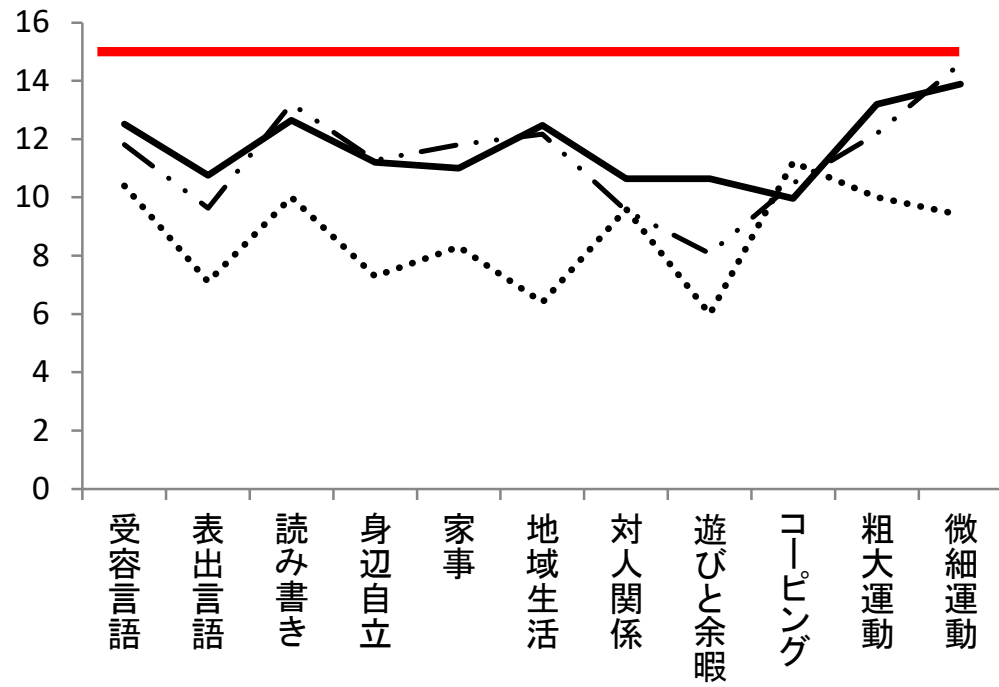


- . - 標準値  
 — 軽度ID  
 ..... 中度ID  
 - - - 重度ID

# ASD



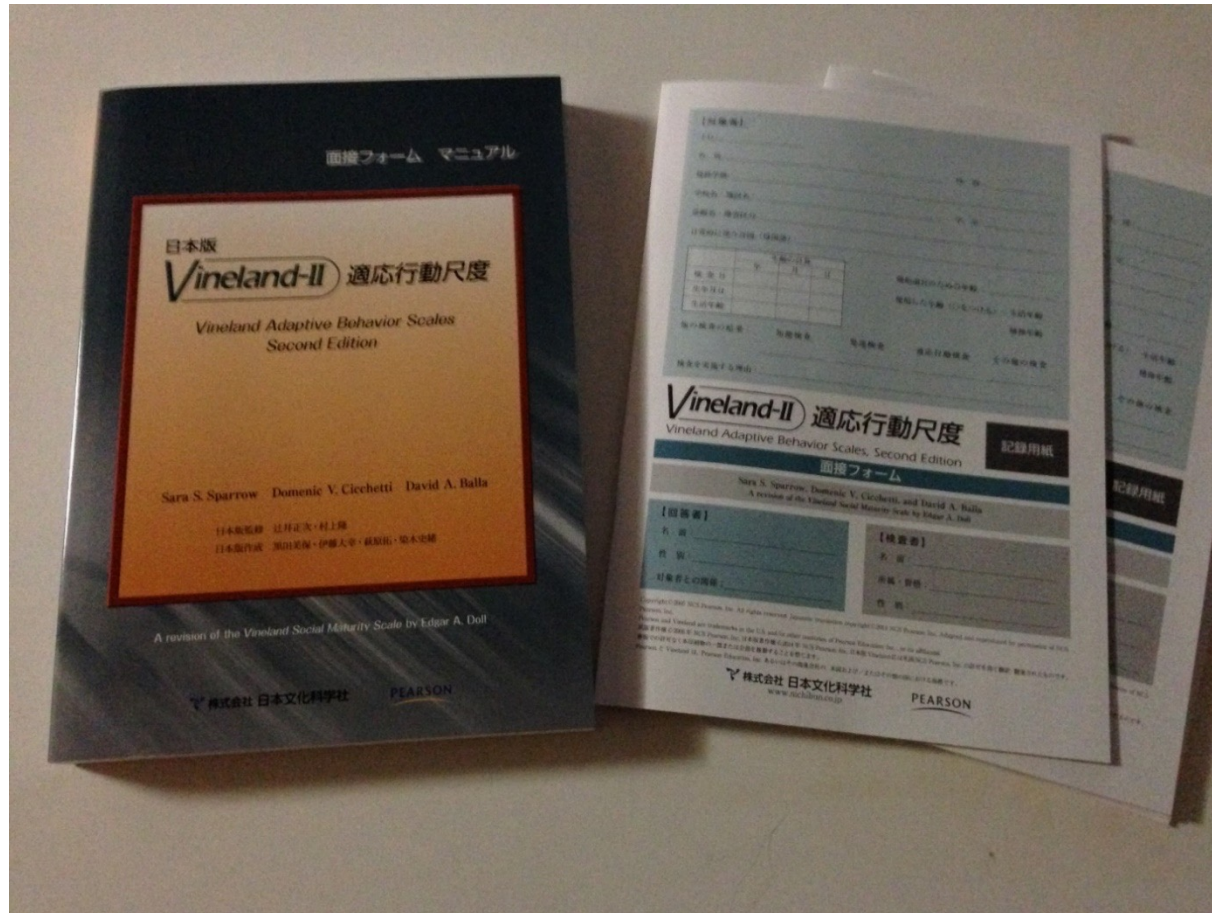
# ASDとADHD



# まとめ

- すべての群で、適応行動総合点と領域標準得点の平均値は一般群より有意に低く、大部分の下位領域v評価点でも同様。
- 不適応行動指標は、一般群より有意に高い。
- ID群では領域プロフィールが比較的平坦である。
- ASD群では「コミュニケーション」や「社会性」が低得点であり、不適応行動では「内在化問題」を中心に得点が高く、また、Mild ID併存群、Moderate ID併存群、Severe ID併存群を比べると、IDが重度であるほど適応行動総合点・領域標準得点・下位領域 v評価点の平均が低くなる。
- ADHD群の領域プロフィールはASD群と類似しているが、不適応行動では「外在化問題」を中心に得点が高い。
- ADHD群はASD without ID群に比べ、適応行動では社会性領域の「対人関係」と「遊びと余暇」、不適応行動では「外在化問題」のv評価点があり有意に高くなっている。

# 日本版Vineland-II (ヴァインランド) 適応行動尺度



日本文化科学社「日本版Vineland-II  
適応行動尺度」  
マニュアル、記録用紙の画像  
日本文化科学社より許可を得て掲載



# Vineland適応行動尺度第二版 (Vineland-II)

- 適応行動の代表的なアセスメントツールとして、国際的に広く利用されている
- 0歳から92歳までの対象に利用できる
- 不適応行動も調べられる
- 用途
  - 知的障害や発達障害の**医学的診断の補助**
  - **介入**や**特別支援教育**などの必要性の判定
  - **介入計画**や**教育方針**の策定・実施後の**効果判定**
  - 知的障害、発達障害、精神疾患、乳幼児の発達などの**研究**

# Vineland-IIでの適応行動評価

適応行動: 個人的・社会的充足を満たすのに必要な日常生活における行動

1. 適応行動は、それぞれの年齢で重要となるものが異なる
2. 適応行動の評価は、個人が関わる環境の期待や基準によって変化する
3. 適応行動は、環境の影響および支援効果などによって変容する
4. 適応行動の評価は、**行動**そのものを評価するものであり、  
**個人の可能性を評価しない**

適応行動  
総合点

領域	下位領域	
コミュニケーション領域	受容言語	3歳～
	表出言語	
	読み書き	
日常生活スキル領域	身辺自立	1歳～
	家事	1歳～
	地域生活	
社会性領域	対人関係	1歳～
	遊びと余暇	
	コーピングスキル	
運動スキル領域 ～6歳、50歳～	粗大運動	
	微細運動	
不適応行動 オプション3歳～	内在化問題	
	外在化問題	
	その他	
	不適応行動重要事項	

不適応  
行動指標

# Vineland-IIの構成

- 適応行動(385項目)
  - コミュニケーション領域(99項目)
    - 受容言語:他者の話に注意を向ける、聞く、理解する
    - 表出言語:話し言葉で意思を伝える
    - 読み書き:文字や文章を読む、書く(3歳以上)
  - 日常生活スキル領域(111項目)
    - 身辺自立:食事、衣服の着脱、衛生に関する行動
    - 家事:手伝い、家事
    - 地域生活:時間、お金、電話、コンピュータなどの管理と使用

# Vineland-IIの構成

- 適応行動 (つづき)
  - **社会性**領域 (99項目)
    - 対人関係: 他者との関わり方
    - 遊びと余暇: 遊び、余暇の過ごし方
    - コーピングスキル: 他者に対する責任感や気配り
  - **運動スキル**領域 (76項目; 0-6歳と50歳以上のみ)
    - 粗大運動: 腕や脚を使った大きい運動
    - 微細運動: 手や指を使った細かい運動
- 不適応行動 (50項目)
  - **内在化問題**: ストレスを自分自身に向ける不適切な行動
  - **外在化問題**: ストレスを他者に向ける不適切な行動
  - **その他**: 上記以外の不適切な行動
  - **重要事項**: 臨床的に重要で深刻な不適応行動

# 検査施行の概要

- 検査用紙：面接調査フォーム記録用紙
- 評価対象者：知的障害、発達障害、精神障害、身体障害、定型発達など制限なし
- 評価対象者適用年齢：0～92歳
- 回答者：親や養育者など対象者をよく知る者
- 検査方式：半構造化面接
- 実施時間：20～60分
- 評価点
  - 2：自立して行っている
  - 1：部分的あるいは時々行っている
  - 0：やっていない の3段階で評定



# 半構造化面接の検査とは？

- 構造化面接の検査：検査を行う時に、実施順序や話す内容のみならず台詞まできちんと決められているもの。

例：WISC-IV知能検査などのウェクスラー系知能検査

- 半構造化面接の検査：検査者の自由度が高く、内容が変わらなければ言い方なども検査者が決めてよく、また、実施順序も変えられるものも多い。

例：Vineland-II適応行動尺度、ADOS-2、ADI-R、PARS-TR、  
CARS-2、CA ADID

# 大きな結果：適応行動総合点

## 知的機能と比較可能

### 知的機能

- 見る、聞く、話す、覚える、考える、など
- 情報処理能力



Wechsler式  
知能検査  
(知能検査IQ)

### 適応行動

- セルフケア、社会性、コミュニケーション、学習や仕事、余暇など
- 環境におけるニーズを自己調整するスキル



Vineland-II適応行動尺度  
(適応行動総合点)



下位領域と領域の得点

下位領域 / 領域	粗点	v評価点 表B.1	領域標準 得点 表B.2	90% 信頼区間 表C.1/C.2	パーセンタイル 順位 表C.3	適応水準 表C.4	相当年齢 表C.5	スタナイン 表C.3
受容言語	39	16		14-18 ± 2		平均的	7:5	
表出言語	65	9		8-10 ± 1		低い	2:7	
読み書き	14	14		13-15 ± 1		平均的	4:10	
<b>コミュニケーション</b>	合計 39	81		74-88 ± 7	10	やや低い		3
身辺自立	64	14		12-16 ± 2		平均的	4:10	
家事	20	17		15-19 ± 2		平均的	6:7	
地域生活	25	15		14-16 ± 1		平均的	4:11	
<b>日常生活スキル</b>	合計 46	100		94-106 ± 6	50	平均的		5
対人関係	36	10		8-12 ± 2		やや低い	2:3	
遊びと余暇	43	14		12-16 ± 2		平均的	5:2	
コーピングスキル	24	14		13-15 ± 1		平均的	4:9	
<b>社会性</b>	合計 38	83		76-90 ± 7	13	やや低い		3
粗大運動	75	12		9-15 ± 3		やや低い	4:7	
微細運動	63	16		14-18 ± 2		平均的	5:9	
<b>運動スキル</b>	合計 28	92		79-105 ± 13	30	平均的		4

強み(S)と弱み(W)

得点-中央値	S / W
2	S
-5	W
0	—
-6.5	—
-1	—
2	S
0	—
12.5	S
-4	W
0	—
0	—
-4.5	—
-2	W
2	S
4.5	—

領域標準得点の合計 =

356				
標準得点 表B.2	90% 信頼区間 表C.2	パーセンタイル 順位 表C.3	適応水準 表C.4	スタナイン 表C.3
88	82-94 ± 6	21	平均的	3

適応行動総合点

中央値の計算方法については、  
マニュアルの第3章を参照する

領域の強み(S)と弱み(W)の基準

S = 領域標準得点  
-中央値 ≥ 10  
W = 領域標準得点  
-中央値 ≤ -10

下位領域の強み(S)と弱み(W)の基準

S = v評価点  
-中央値 ≥ 2  
W = v評価点  
-中央値 ≤ -2

	粗点	v評価点 表B.3	90% 信頼区間 表C.6	不適応水準 表C.7
不適応行動指標	1	13	11-15 ± 2	平均的
内在化問題	0	14	13-15 ± 1	平均的
外在化問題	1	15	13-17 ± 2	平均的

不適応行動重要事項

2点か1点の場合、項目番号を○で囲み、S(強度)かM(中等度)を○で囲む

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14

日本文化科学社「日本版Vineland-II  
適応行動尺度」マニュアル、  
43ページより転載  
日本文化科学社より許可を得て転載

## 結果の概要

標準化における統計的処理はWISCやWAISと同じであり、従って適応行動総合点はFIQと比較することができます。

---

適応行動総合点：平均 (M) =100、標準偏差 (SD) =15

---

領域 標準得点：コミュニケーション、日常生活スキル、社会性、運動スキル領域：M=100、SD=15

---

下位領域 v-評価点：M=15、SD=3

---

不適応行動領域：不適応行動指標・内在化問題・外在化問題：v-評価点：M=15、SD=3、重要項目：行動の頻度（粗点2、1）、強度（S、M）

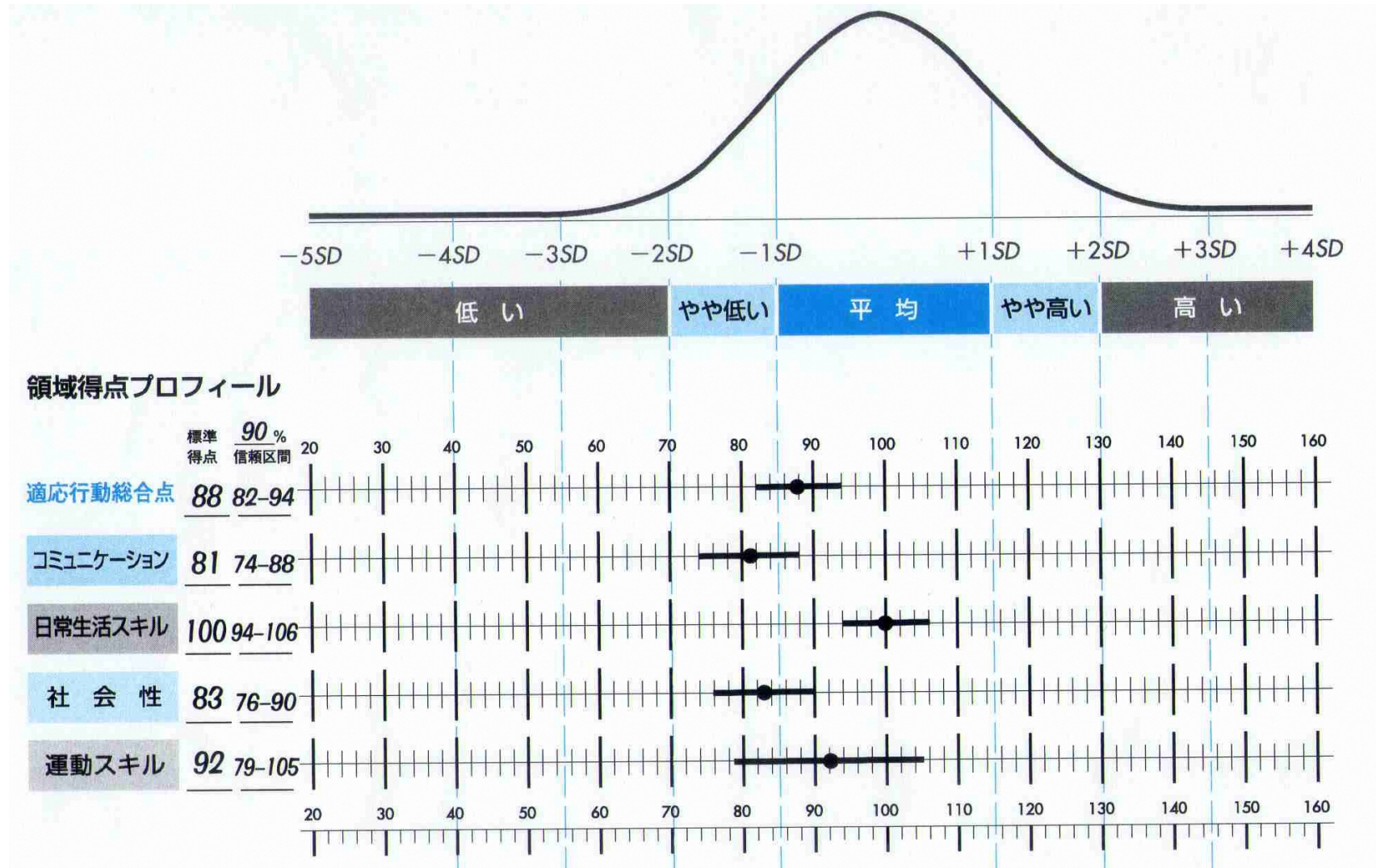
---

適応水準、相当年齢、スタナイン、強みと弱み、対比較

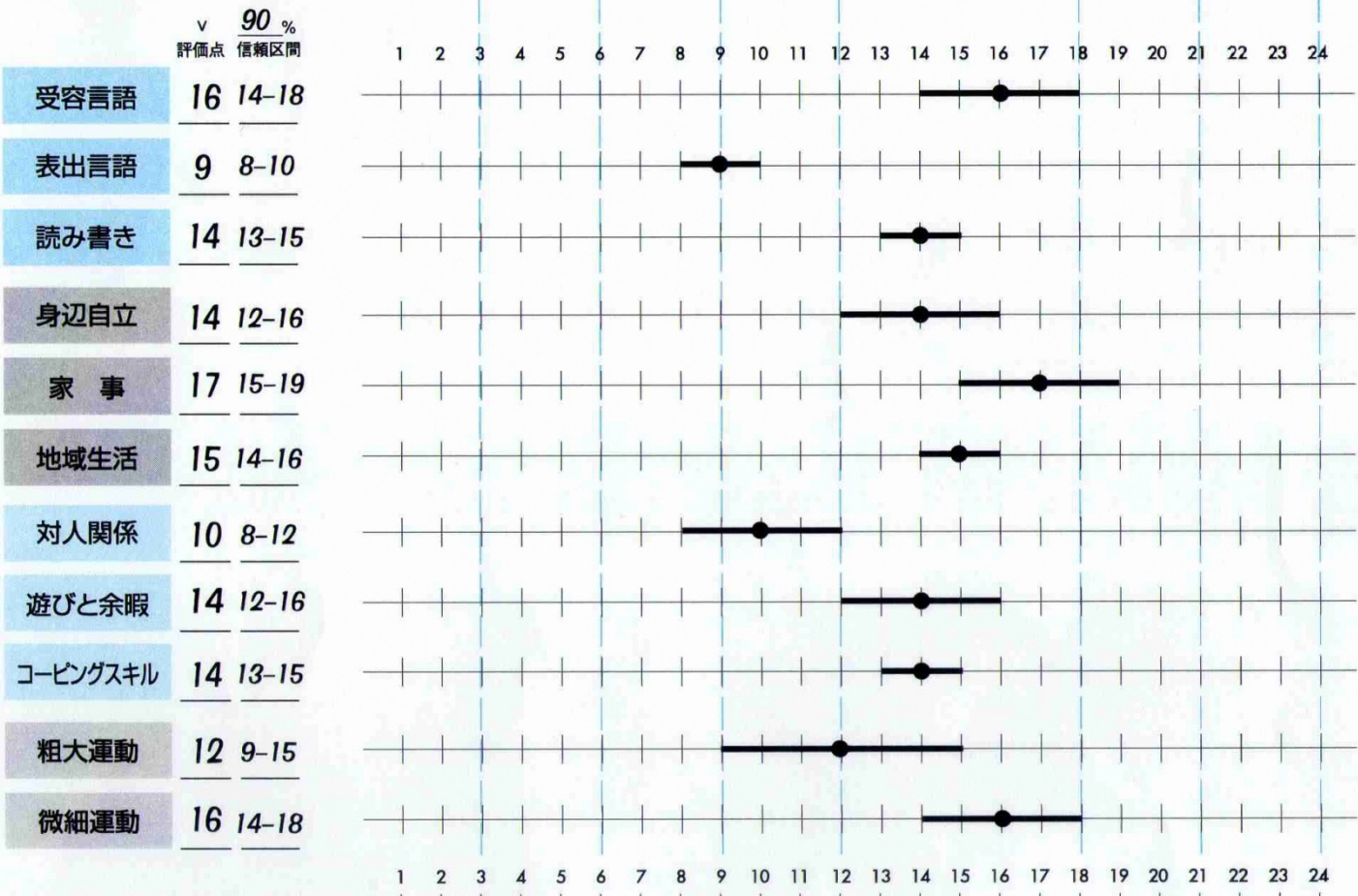
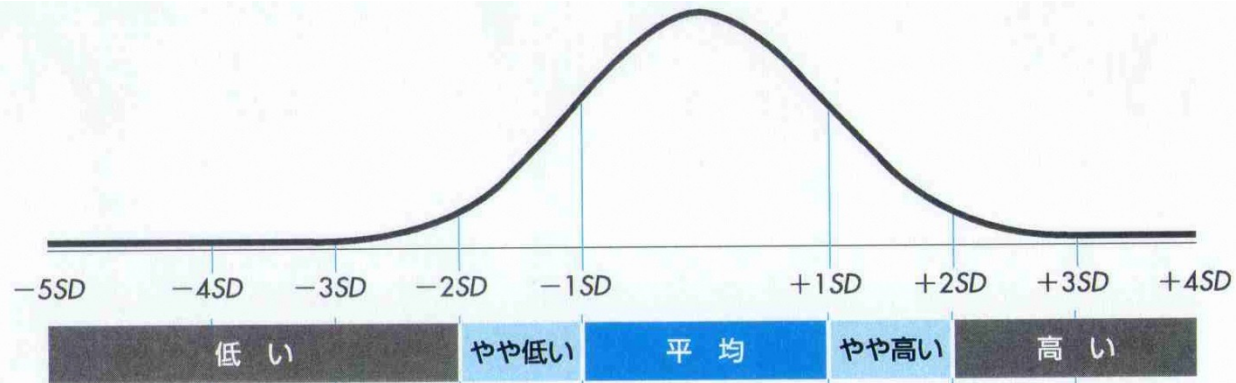
# 不適応行動指標と不適応行動重要事項

- 不適応行動全般を示す「**不適応行動指標**」および、その下位尺度である「**内在化問題**」「**外在化問題**」のV評価点, 信頼区間, 不適応水準(記述分類)を把握することができる。
- 「**不適応行動重要事項**」には換算点などではなく、臨床上重要な項目群で構成されており, 重症度評価など有益な情報を得ることができる。

# Vineland-IIの結果







# 項目は具体的で、短期の支援目標にもできる

日常生活スキル領域		2= 通常または習慣的にしている 1= 時々あるいは部分的にしている 0= まったくしていない DK= 不明 N/O=機会なし				チェック欄
: 飲食              : 排泄              : 衣服の着脱              : 入浴              : 身だしなみ              : 衛生						
身 辺 自 立	24				2 1 0	DK
	25				2 1 0	DK
	5, 6 →  26				2 1 0	DK
	27				2 1 0	DK
	28				2 1 0	DK
	29				2 1 0	DK
	30				2 1 0	DK
	31				2 1 0	DK
	32				2 1 0	DK
	33				2 1 0	DK

日本文化科学社「日本版  
Vineland-II適応行動尺度」  
記録用紙、  
11ページより改変転載  
日本文化科学社より許可を  
得て転載

# 結果の見方

1. 全般的な適応機能を見る（IQと比較して見る）

2. 適応行動領域におけるパフォーマンスを見る

3. 下位領域におけるパフォーマンスを見る

4. 領域標準得点のパターンや下位領域のv評価点のパターンを評価し、強みと弱みを見る

5. プロファイルの凹凸と実際の行動を関連して考える。

6. 不適応行動について考える。

• 支援においては  
各項目を見ていく  
ことが  
重要！！

# Vineland-IIから支援へ 目標を立てる時の注意点

- 知的能力や発達特性、環境を踏まえながら、結果を総合的に考える
- 項目のうち、部分的にできている、時々するという評価のある「1」の項目について短期目標を立てると無理がない。
- 0でもどうしても重要な項目について目標を立てる。
- 優先順位をつける（一度に多くの目標を立てない）。



# 3. 架空事例を通して考える臨床使用 ～検査から支援まで～

# 成人期に初めて診断を受けたA(架空症例)

- 現在37歳
- 胎児期・周産期には問題なし。2歳違いの姉と両親の4人家族
- 母親は、社会性の無さや言葉の理解の難しいなどで問題を感じていたが、乳幼児健診では問題を指摘されない。
- 幼稚園入園後、集団行動がとれないことが目立ち、母親は小学校入学時に自主的に地域の教育相談室で就学の相談をした。しかし、知能検査の結果、問題はないということで、通常級に行くように言われたため、そのまま通常級に通った。
- 学校時代を通じて、友人はできなかった。中学校では、いじめの対象となっていたが、不登校になることはなかった。

## A (架空症例) 2

- コンピューターや機械関係に興味があり、高校卒業後コンピュータ関係の専門学校に進学。卒業後印刷会社に就職。
- 印刷会社で上司からの注意などが重なり、入社後2年で抑うつ状態となり精神科を受診。
- 半年の休職期間を経て、会社を辞めアルバイトをするが、どれも長続きせず、抑うつ状態を繰り返すため、発達障害をうたがわれ、精神科から発達障害専門医療機関に紹介された。
- 現在は、自宅に住みながらアルバイトを週3回している。

# テストバッテリーを組む

## フォーマル(標準化)アセスメント



## インフォーマル(非標準化)アセスメント

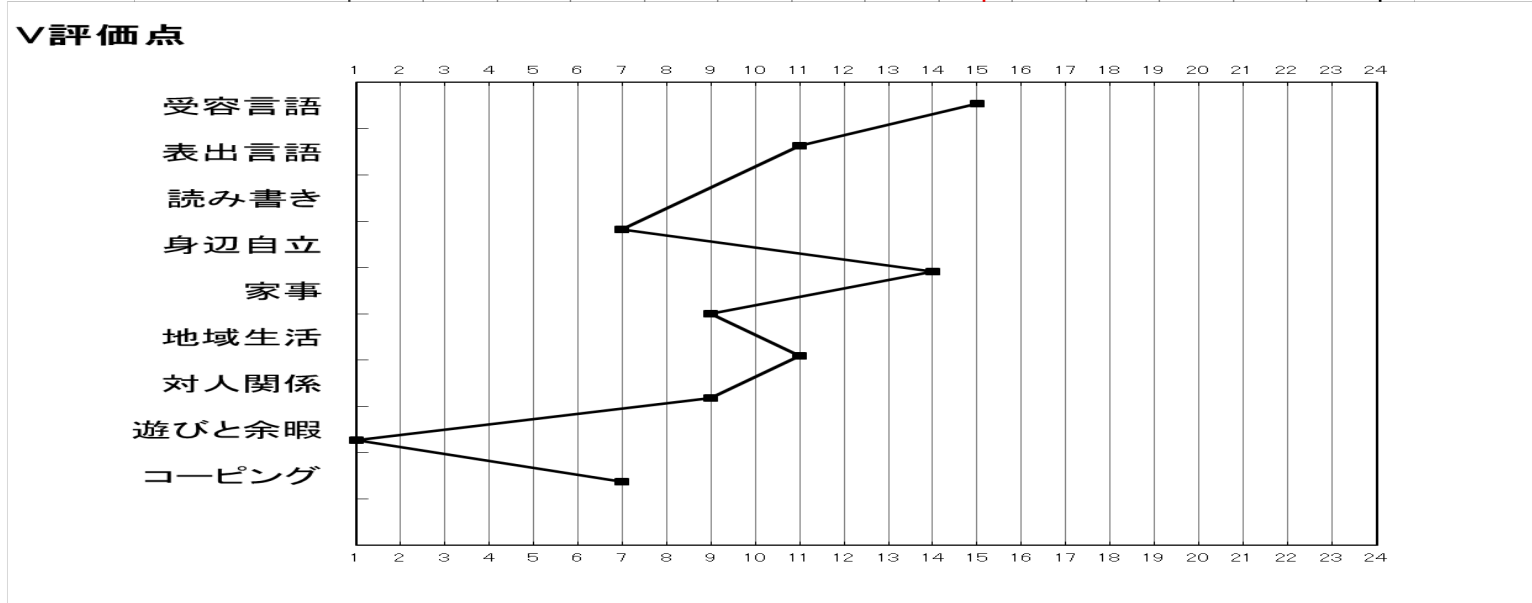
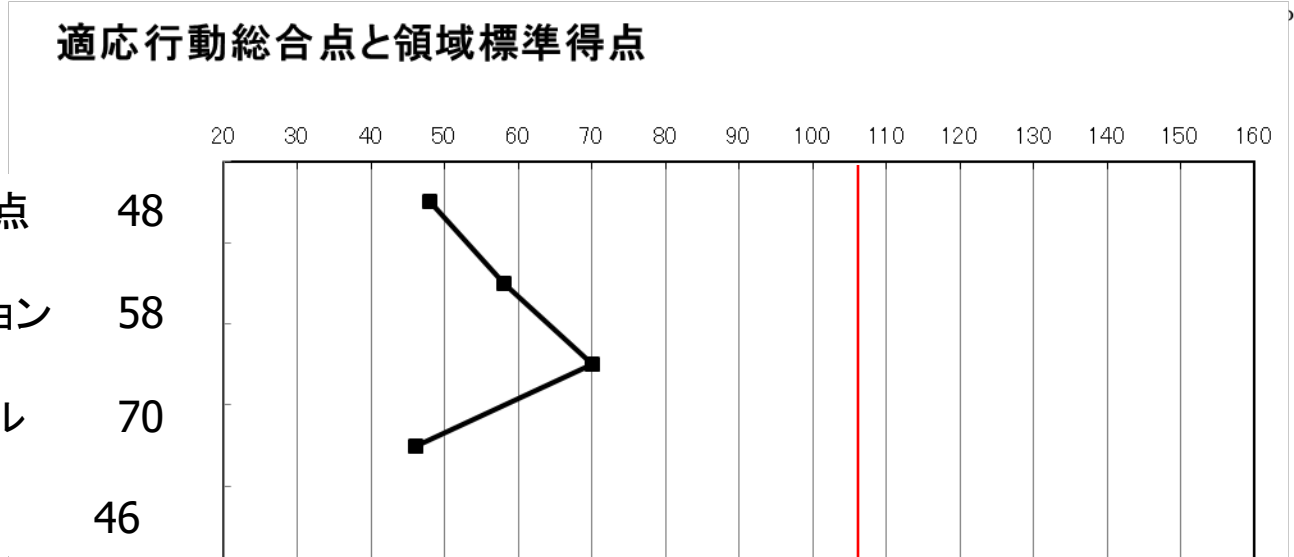


# Aさんのアセスメントの結果

- 年齢:37歳 男性
- **WAIS**結果  
VIQ:119, PIQ:90, FIQ:107  
VC120, PO99、WM105、PS75
- **AQ** 24 (カットオフ 33)
- **ADOS**:意思伝達5(自閉症カットオフ値=3; 自閉症スペクトラムカットオフ値=2)  
相互的対人関係8(自閉症カットオフ値=6; 自閉症スペクトラムカットオフ値=4)  
意思伝達+相互的対人関係 合計 13  
(自閉症カットオフ値=10; 自閉症スペクトラムカットオフ値=7)  
想像力/創造性1, 常同行動と限局された興味3 (自閉症カットオフ値=10)
- **ADI-R**: (A)相互的対人関係の質的異常24 (自閉症カットオフ値=8)  
(B) 意思伝達の質的異常 14 (自閉症カットオフ値=7)  
(C) 限定的・反復的・常同的行動様式 6 (自閉症カットオフ値=3)  
(D) 生後36か月までの顕在化 4 (自閉症カットオフ値=1)

# Aさんの適応行動尺度結果

WAIS-III  
 FIQ 107  
 VIQ 119  
 PIQ 90



# Aさんの包括的アセスメント(多軸)のまとめ

ICD-10	DSM-IV	状態	
1	I	精神障害	うつ状態
2	I	特異的発達障害	AQ, ADOS-2, ADI-R : 自閉スペクトラム症
3	II	知的水準	WAIS-III FIQ 107    VIQ 119 > PIQ 90
4	III	一般身体疾患	特記なし
5	IV	心理・社会的・環境的問題	小学校・中学校と、いじめを受けている。対人関係は希薄。家族と暮らしている。母親は保護的だが、父親と妹はそうではない。
6	V	適応機能の全体的評定	失業中、家庭では落ち着いて過ごしている。 Vineland適応行動総合点48

# 成人期では何を目標にするのか？

- 知的水準に比べて、適応行動総合点及び全領域の適応行動の得点が低い。
- 特に社会性領域の得点が低い。
- 下位領域では、「受容言語」が平均域
- 「読み書き」「遊びの余暇」「コーピング」は特に低い。
- **読み書き**: 新聞はネット記事を読むことなどから始める。  
事務的な手紙を書くなどのスキルを身につける
- **遊びと余暇**: 友人のいない場合、できない項目も多い。  
しかし成人期に友人を作ることを目標にする必要はないのかも？同好会などに参加してみる。
- **コーピング**: 社会的なふるまいについて、相談できるキーパーソンを見つける。相談スキルを身につける



# 適応行動の検査結果と支援のポイント

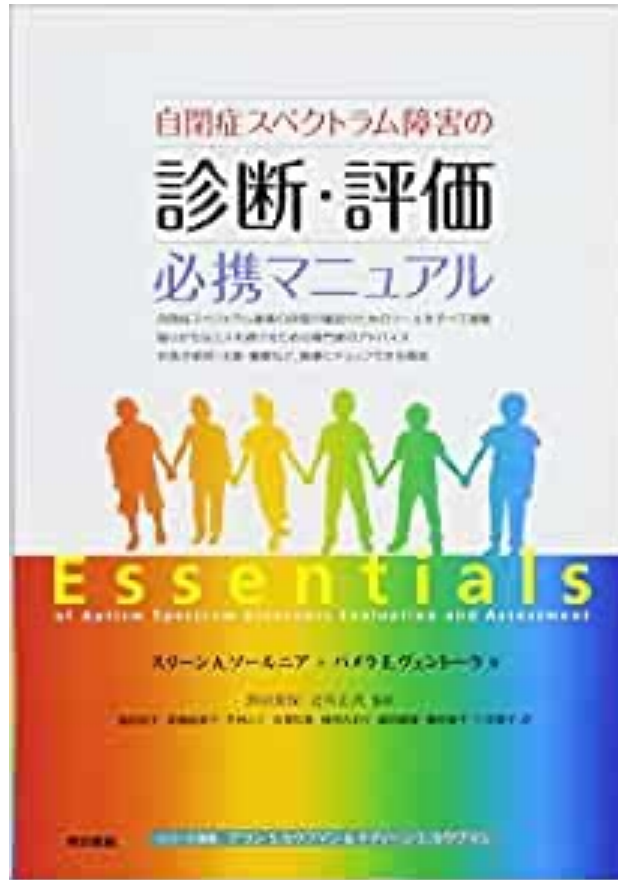
- 定型発達 of 適応行動が「標準」「支援目標」ではない
- 支援における優先順位を考える!
- 支援者が着眼している支援課題は、どのようなものもすべて重要。しかし、限られたマンパワーの中での有効な支援を考える場合、優先順位とバランスを考えることがより重要。
- 不適応行動の評価と適応行動の評価とを見比べる。
- 困った行動をどうするかということと同時に、困った行動に対応する適応行動をどう増やすのかが重要な着眼点になる。

# 発達障害領域のテスト開発と臨床のまとめ

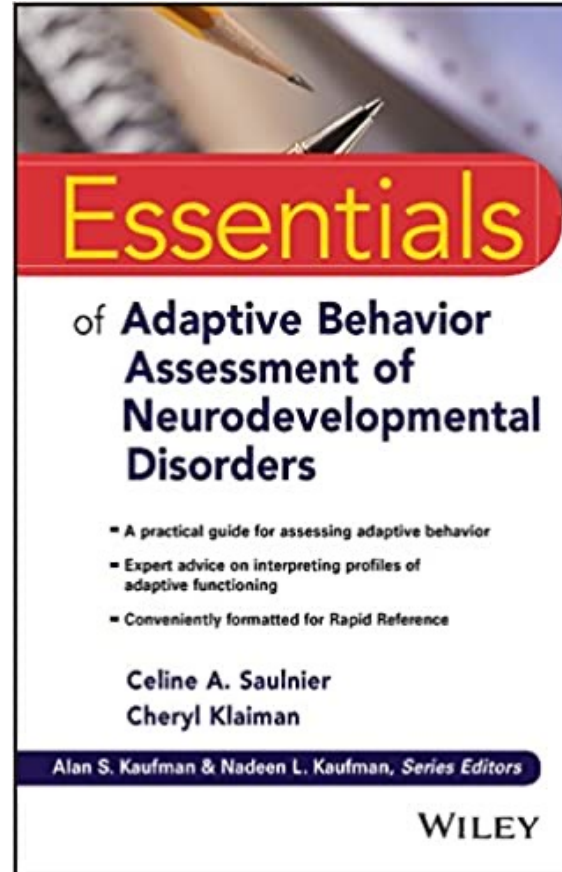
- Vineland-II適応行動尺度を通して、発達障害臨床におけるテストの意義を考えた。
  - 障害臨床において、障害の定義により求められるものも変わると考えられる。
  - 以前は知能や障害特性を調べる検査が重要視された。
  - 現在は、適応行動に重点が移っている。
  - 効果的な支援を提供できるための検査をいかに作るのか、また、使うのが重要である。

# 参考文献

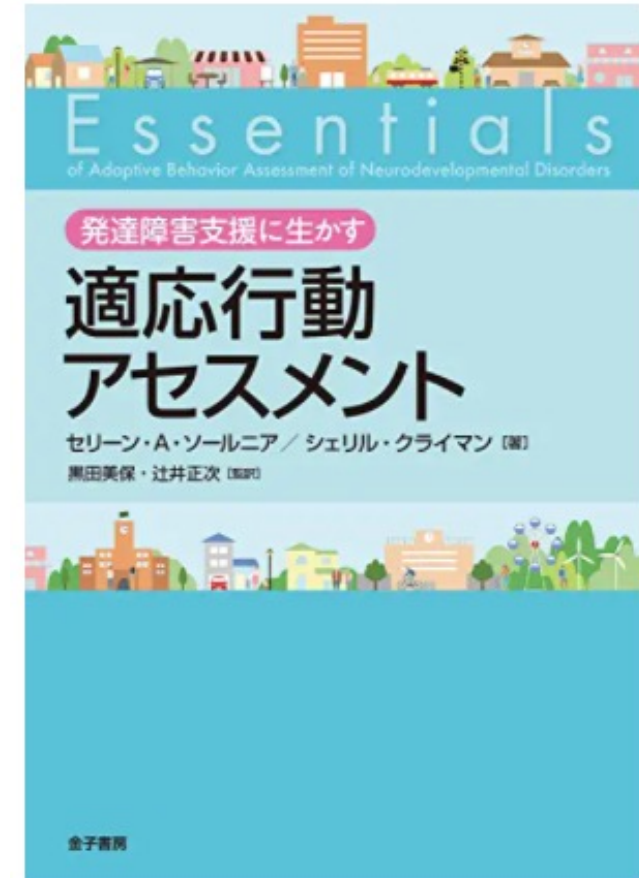
- 黒田美保・伊藤大幸・染木文緒・萩原拓.(作成)/辻井正次・村上隆(監修)「Vineland-II適応行動尺度日本版」日本文化科学社.
- 黒田美保著「公認心理師のための発達障害入門」金子書房.
- 黒田美保編著「ハンディシリーズ:これからの発達障害のアセスメント～支援の一步となるために」金子書房.
- 黒田美保「知的機能と適応行動のアンバランス」p28-34. 萩原拓(編著)発達障害のある子の自立に向けた支援:小・中学生の時期に、本当に必要な支援とは?.金子書房.
- 黒田美保. ASDの豊かな生活を築くためのアセスメントの新展開. 広汎性発達障害の明日のために. アスペハートに連載.



自閉症スペクトラム障害の診断・評価必携  
マニュアル (2014/2/12)  
スリーン ソールニア, パメラ ヴェントーラ  
(著)  
黒田 美保, 辻井 正次 (監修, 翻訳),



Essentials of Adaptive Behavior  
Assessment of Neurodevelopmental  
Disorders (Essentials of Psychological  
Assessment) (2018/5/1)  
Celine A. Saulnier, Cheryl Klaiman (著)



ご清聴ありがとうございました